

後期旧石器時代後半期の居住形態の地域的様相

—愛鷹・箱根第3期・第4期の遺跡群—

中村 雄紀

要旨 本稿では、愛鷹・箱根第3期・第4期の石器群を対象として、後期旧石器時代後半における居住形態変化の地域モデルについて検討した。居住形態の変化と関連して石器群の技術構造、石材消費も推移している。また時期ごとの遺跡分布から開発領域の変化を促え、これを気候変動に伴う資源分布の変化と対応したものと推測した。第3期前半には、この地域で活動した狩猟採集民は遊動性が高く、各局面に即応可能な石器製作システムを保持し、山麓の低位丘陵を主たる開発領域としていた。これは第4期前半までに兵站的な居住形態へ移行し、効率的な石刃製作に基づく石器製作システムが採用され、開発領域は箱根山山腹へも広がった。第4期後半には箱根山山腹への回帰的移動が箱根産黒曜石の獲得を組み込んだ形で行われるようになり、箱根産黒曜石の潤沢な供給を背景として尖頭器の量産を行う石器製作システムが現れた。このように、石器群と居住形態の変遷は地域開発の進行に対応したものと位置づけた。

1. はじめに

後期旧石器時代の後半期には各地域の石器群は地域性が顕著になり、各地域の生態系に適応した石器群が発達していくことが知られている（佐藤 1992）。各地域が主たる開発領域とされるようになった結果、よりその環境に適合した石器群が成立しているのであり、石器群の変化は、生業戦略からの必要に応じてそれに適合する技術が採用されていった結果として捉えられる。本稿ではこの観点から、愛鷹・箱根山麓における後期旧石器時代後半期の石器群を対象に、地域的な石器群の変遷過程の説明を試みる。この地域では、すでに後期旧石器時代前半期の陥穴が地域的条件に対応して現れたものであったことが指摘されているが（佐藤 2002；稲田 2004；今村 2004）、後期旧石器時代後半期では標高50m程度の丘陵上から標高400～500mの山腹、最高所では標高866mの箱根カルデラ内まで遺跡が分布することが知られており、南関東の台地上などとは異なった地域的条件の下での居住形態モデルが求められる。

愛鷹・箱根山麓の後期旧石器時代後半期の石器群はBB I層から休場層にかけて出土するが、その中でも「箱根・愛鷹山麓の旧石器時代編年」（静岡県考古学会 1995；1996）における第3期から第4期にかけての石器群を対象とする。この時期には、石器群に技術形態学的特徴の変化が認められるとともに石器集中部の構成など遺跡内容も大きく変化することが知られており、行動論的な変化があったことが想定される。この点について筆者はさきに第4期の石器群を中心として検討を行った（中村 2005）。本稿では第3期の石器群についてもより詳細に検討を行い、石器群の時間的変化の背後にある居住形態の変化を明らかにしたい。検討の視点として、石材消費から想定される遺

跡間連鎖の関係に加え、以前詳しく検討を加えていなかった遺跡の立地・分布を含めて考察する。

II. 愛鷹・箱根山麓の地形と石材環境

本稿で対象とする地域は、愛鷹山の南麓から、箱根山の西麓、東麓にかけてである。山地は愛鷹山の南麓と箱根山の西麓とで傾斜がやや緩やかとなっており、両者の裾合部では扇状地が発達している。旧石器時代の遺跡はこうした地形と関連して、愛鷹山の南麓と箱根山の西麓、現在の沼津市、長泉町、三島市、函南町にかけての地域に多く分布している。現在知られている遺跡分布は土地開発や調査の密度による影響を受けたもので、必ずしも真の遺跡分布は明らかでないかもしれないが、おおよそ次のような傾向が把握されている。遺跡分布は地図で等高線の間隔が広い部分、すなわち比較的傾斜の緩い部分となっている愛鷹東南麓、箱根西麓に集中する傾向が明瞭である。これに対し、傾斜がやや急になる愛鷹南西麓、さらに急峻な地形となる箱根東麓では相対的に遺跡が少ない(図1)。愛鷹南麓では標高220m付近で大きく傾斜が変換し、それ以下では傾斜の緩やかな丘陵状の地形が続く。また多くの河川がこの傾斜変換地の湧水を源として流下しており(沼津市教育委員会 1998: 4頁)、遺跡の集中域はこうした河川や湧水環境と関連するかのようによ遺跡は標高100~200m前後の尾根上に位置する。標高の高いところについては、愛鷹山では現在のところ、休場上遺跡など標高約300m程度の地点まで遺跡の存在が知られている。一方、箱根西麓では、標高100~400mで多くの遺跡が知られているものの、低位の丘陵から高所では標高800mを越す箱根山のカルデラ内まで遺跡が分布する(三島市教育委員会 1999: 4・5頁)。

ところで、この地域の後期旧石器時代の石器石材については黒曜石が重要な位置を占め、次いでホルンフェルス¹⁾、ガラス質黒色安山岩が多く用いられるという傾向が全時期を通じて認められるが、これらの主要3石材についてはいずれもその産地が愛鷹・箱根山麓とその周辺に分布している。箱根山からその東にかけて畑宿、芦ノ湯、上多賀、鍛冶屋などの黒曜石原産地、及びガラス質黒色安山岩の原産地がある。また伊豆半島南部には柏峠の黒曜石原産地があり、ガラス質黒色安山岩原産地も点在している。一方、ホルンフェルスについては、石器石材として利用可能なものは富士川流域の河床礫、或いは富士川河口から狩野川河口にかけての海浜礫などにあるとされている(池谷・望月 1998)が、愛鷹・箱根山麓を流れる黄瀬川・狩野川の流域では採取できない(前嶋・森島 2003)とされ、愛鷹・箱根山麓直下の海岸線などに線状に分布することになる。

以上とは別に、信州の和田峠・諏訪・八ヶ岳周辺に産する黒曜石も多く用いられている。愛鷹・箱根山麓と石材原産地との地理的關係を考えると、甲府盆地から富士川流域を經由して西側から箱根・愛鷹山麓に至る搬入経路が推定される。尚、黒曜石については、信州系と伊豆・箱根系とはある程度外見で識別が可能であるが、最近10数年では蛍光X線による原産地推定分析が盛んに行われている²⁾。この他、石器群における相対的な割合は少ないが細粒凝灰岩、チャート、珪質頁岩、玉

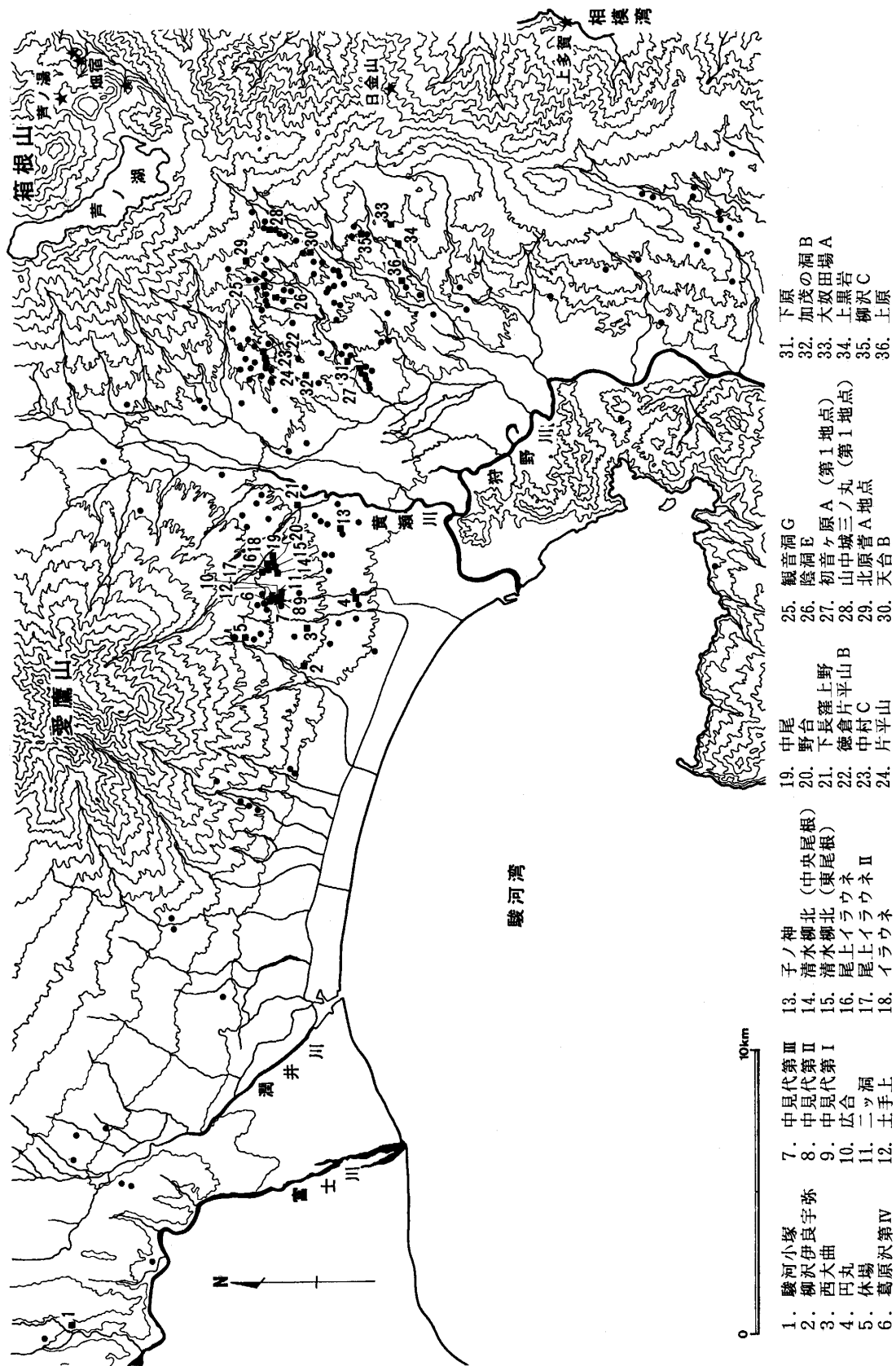


図1 愛鷹・箱根山麓の旧石器時代遺跡分布

髓などの石材も用いられているが、その原産地については特定されるに至っていないようである。

旧石器時代の遺跡の分布・立地については以上のような地形、並びに石材原産地との位置関係を考慮することが必要である。

III. 愛鷹・箱根山麓の後期旧石器時代後半期の石器群の変遷

1. 後期旧石器時代後半期の石器群の出土層位と編年

本稿では居住形態の時間的変化について考察を行うが、石器群の編年については先行研究が多数行われている。出土層位を基にこれまで幾つもの編年が提示され（瀬川 1983；関野 1990；高尾 1994など）、さらに「箱根・愛鷹山麓の旧石器時代編年」（静岡県考古学会 1995・1996）では後期旧石器時代は5期に大別され、第1期、第2期がNL層以下のAT降灰期以前、第3期がBB I層からBB 0層にかけての石器群、第4期が休場層における砂川期からナイフ形石器終末期に相当する石器群、第5期が細石刃石器群とされている。

後期旧石器時代後半期については、西南関東の編年と対比して、AT層準がニセローム（NL）層にあり、第1黒色帯（BB I）から第0黒色帯（BB 0）がIV層下部・V層段階に相当し、休場層がそれ以降に当たると考えられている（図2）。休場層は上・中・下（YLU・YLM・YLL）の3層（箱根西麓でも比較的標高の高い観音洞遺跡群、山中城三ノ丸遺跡などでは各層の間に断続的にスコリア層がみとめられる）に区分され、西南関東の砂川期並行の石器群から細石刃石器群ま

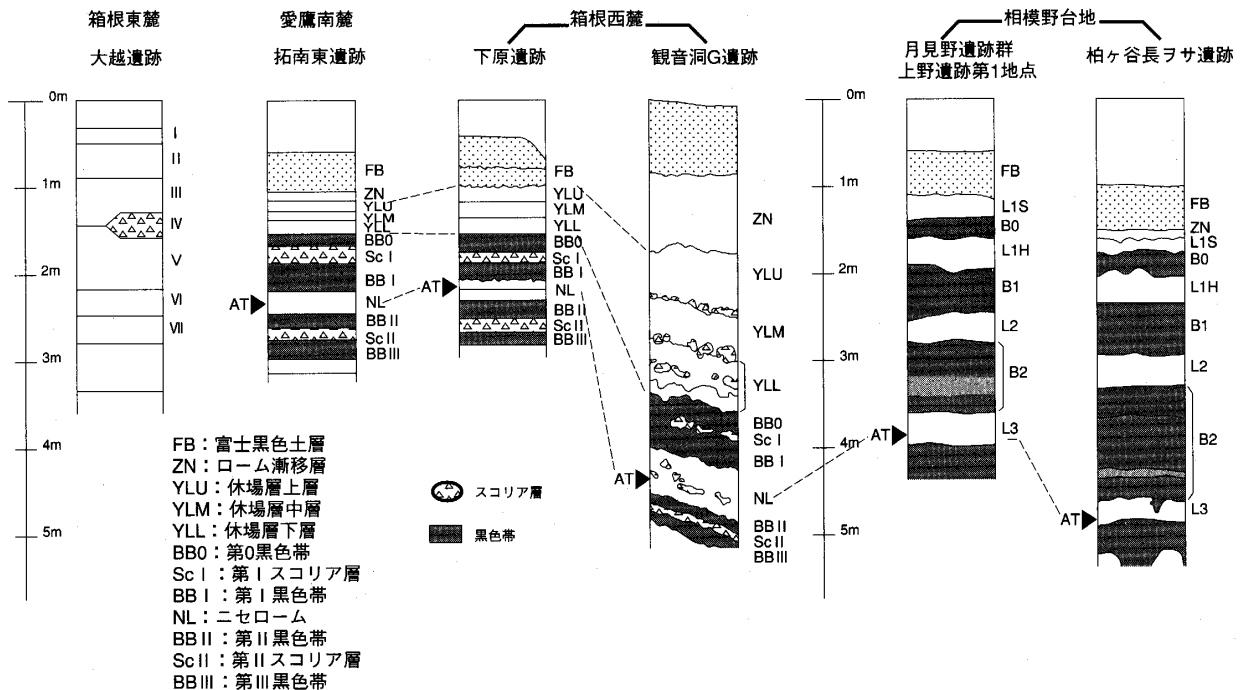


図2 遺跡の層序

で出土し、さらに縄文時代草創期の有茎尖頭器などが混在する例もある。

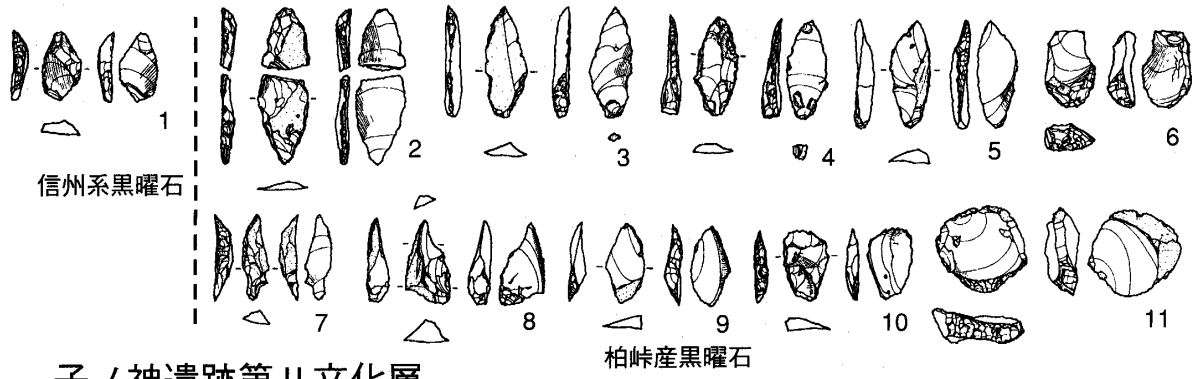
本稿で扱う時期は主に「箱根・愛鷹山麓の旧石器時代編年」(静岡県考古学会 1995; 1996)における第3期から第4期にかけてとなるが、第3期は2段階、第4期は3段階に細分されている(笹原 1995; 前嶋 1995)。大別編年については現在でもおおよそ変更の必要はないものと思われるが、細分編年に関してはその後の資料の増加等も考慮して、本稿では第3期と第4期とをそれぞれ大きく前後2つに分けることとする。

2. 第3期

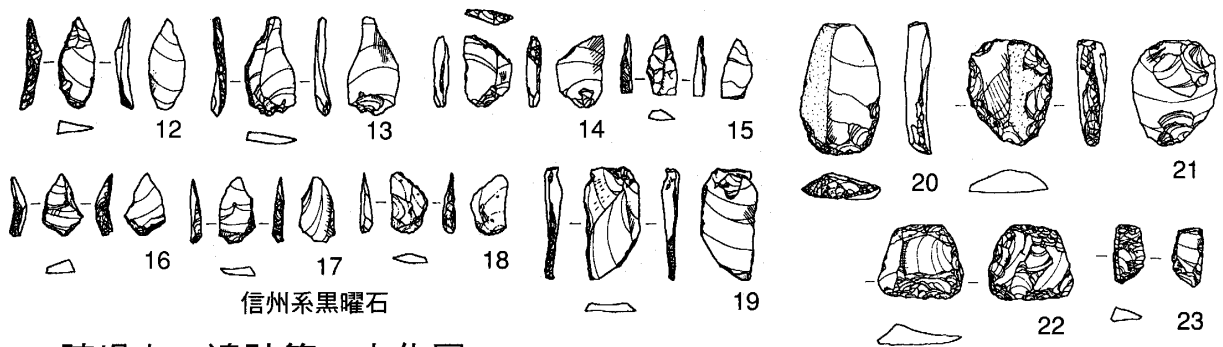
(1) 第3期前半の石器群

出土層準ではNL層直上とされる石器群からBB I層、Sc I層出土の石器群が含まれる。この時期の遺跡は第4期前半・後半の遺跡に次いで多くの遺跡が知られている。尚、これに対して、BB I層より下位のNL層中では石器群の出土例が少なく、纏まったものとしては清水柳北遺跡東尾根のNL層下部の石器群が知られているのみで、それ以降はNL層直上が出土層準とされる子ノ神遺跡第II文化層まで集中部を形成する石器群が見つかっていない。NL層中とされるAT降灰は、近年のAMS法などによる放射性炭素年代測定では24000~25000BPに纏まった値が得られている(辻他 2000)が、桜畑上遺跡においてNL層直上からBB I下部で出土した炭化物の放射性炭素年代測定の結果、約24000~25000BP(望月他 2003)と、ATの年代に近い値が得られており、BB I層の石器群はAT降灰期直後移行に位置づけられる。

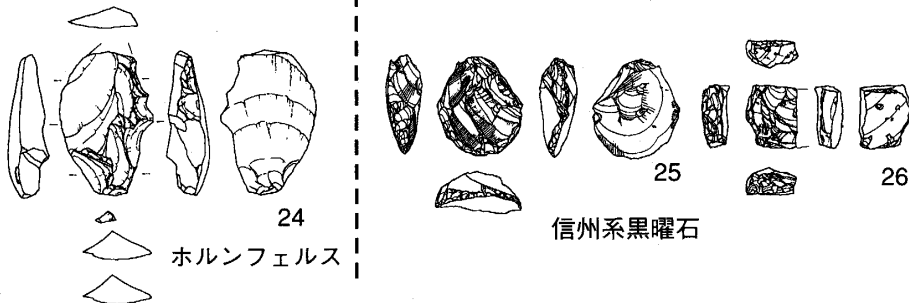
BB I層でも層位的に古く位置づけられているのはNL層直上出土とされる子ノ神遺跡第II文化層(沼津市教育委員会 1982)(図3-1~11)で、小形の縦長剥片を素材とする二側縁加工のナイフ形石器が主体となっている。石材はほとんどが柏峠産黒曜石である。BB I層下部出土とされる陣場上B遺跡第I文化層(長泉町教育委員会 1994)(図3-12~23)は子ノ神遺跡に類似する二側縁加工のナイフ形石器も見られるが、素材の一端を二次加工で斜めに切断する一側縁加工のものが多い。一方、同じくBB I層下部とされる尾上イラウネ北遺跡(沼津市教育委員会 1992)(図3-24~26)では大形の縦長剥片に粗い鋸歯縁加工を施したナイフ形石器(24)が認められる。桜畑上遺跡BB I層下部出土石器群(静岡県埋蔵文化財調査研究所 2003b)(図3-27~32)のナイフ形石器にも鋸歯縁加工を用いたもの(28)や大形基部加工のもの(27)がある。BB I層上部を中心とする上ノ池遺跡第III文化層(静岡県埋蔵文化財調査研究所1998a)(図4-1~9)では、大形厚手の縦長剥片を素材とし、二側縁に粗い鋸歯状の加工を施すナイフ形石器が特徴的である。特に両側縁からの大振りの加工が器体中央で交差し、基部断面が三角形となる形態のもの(4, 7)はBB I層中部以降の石器群で安定して認められるようであり、第3期前半の中でも新相に特徴的なものと見なされる。また、同様の鋸歯状の加工による角錐状石器(1)も出土している。イラウネ遺跡第II文化層(長泉町教育委員会 1986)(図4-10~21)では大形鋸歯状二側縁加工、大形基部加工、小形二側縁加工のナイフ形石器が見られる。また、BB I層直上を中心とする中見代第I遺



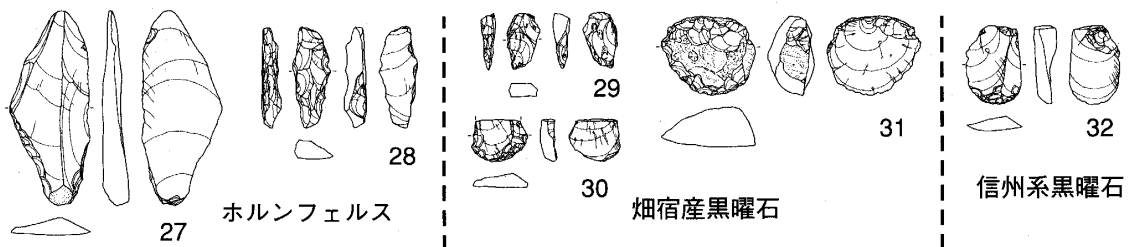
子ノ神遺跡第II文化層



陣場上B遺跡第I文化層



尾上イラウネ北遺跡

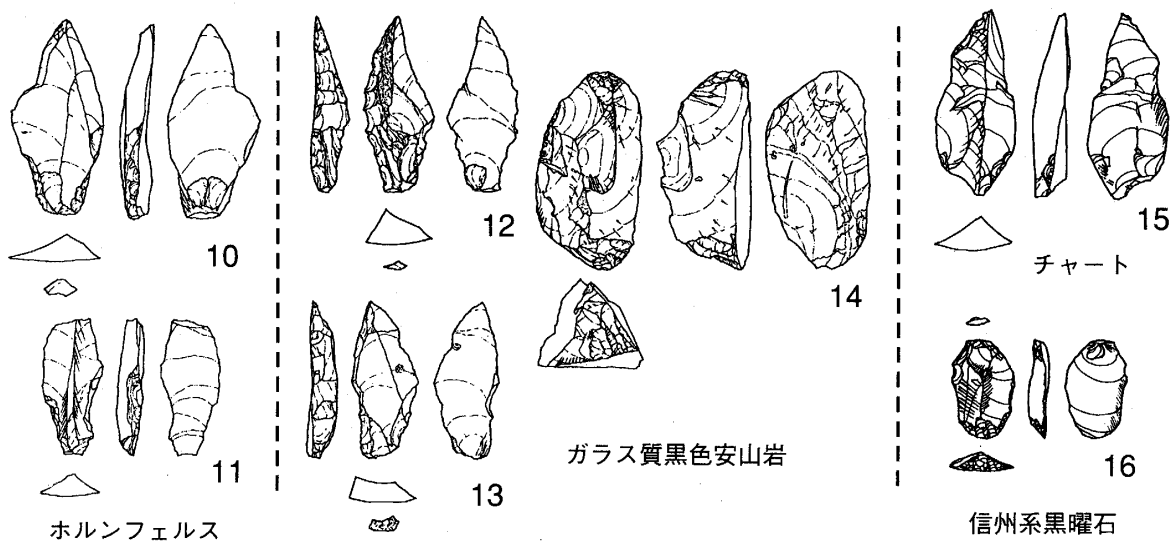
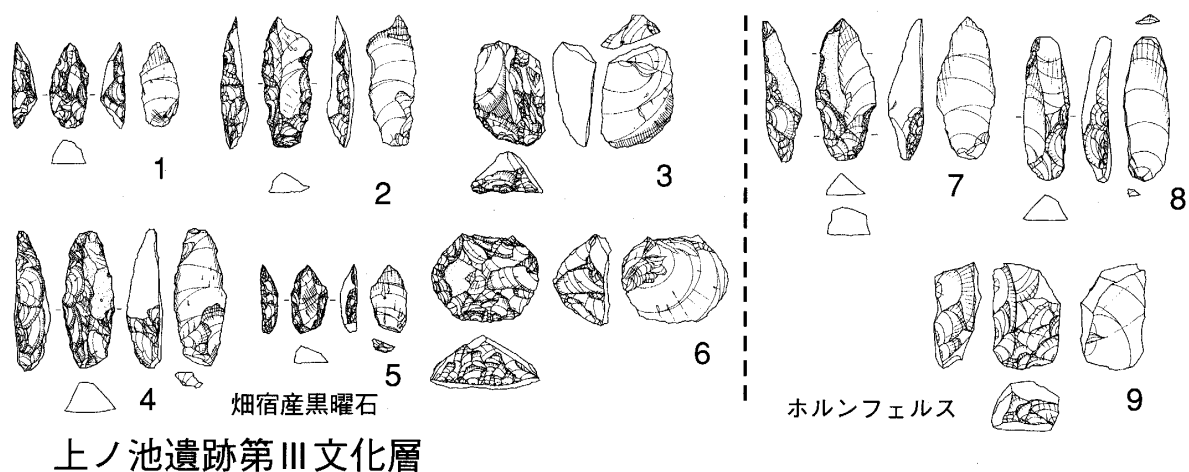


桜畑上遺跡

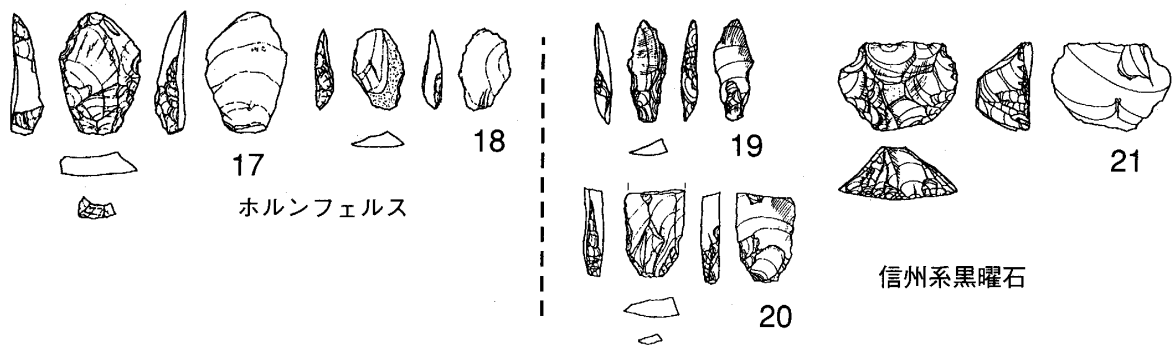


図3 第3期前半の石器群 (1)

後期旧石器時代後半期の居住形態の地域的様相



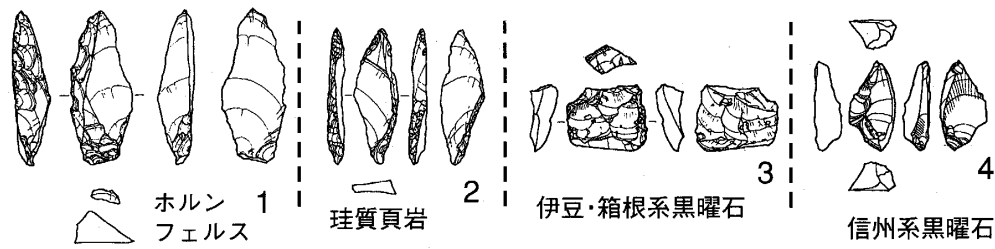
イラウネ遺跡第II文化層4・5号ブロック



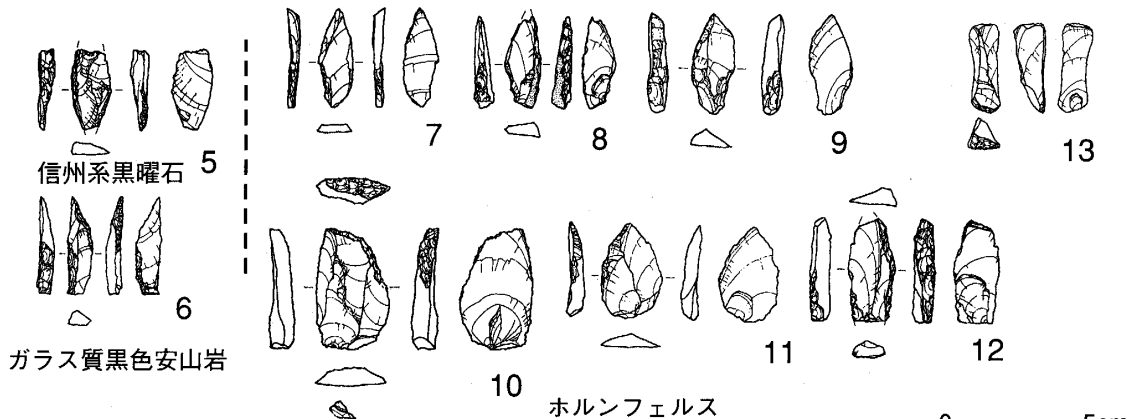
イラウネ遺跡第II文化層1~3号ブロック



図4 第3期前半の石器群 (2)



中見代第Ⅲ遺跡第Ⅶ層



中見代第Ⅰ遺跡第Ⅱ文化層

図5 第3期前半の石器群 (3)

跡（沼津市教育委員会 1989b）（図5 - 5～12）では小形縦長剥片を素材とする二側縁加工のナイフ形石器に素材を斜めに切断する一側縁加工のナイフ形石器が伴っている。

以上のことからBB I層の石器群には大きく分けて2つの様相が認められる。まず小形の二側縁加工・一側縁加工のナイフ形石器を主体とする石器群がBB I層下部からSc I層まで認められ、これに対し大形の基部加工、或いは厚手の素材を用いた鋸歯状の加工を特徴とするナイフ形石器を含む石器群も認められる。円形搔器など特徴的な器種もこの時期を通して出土している。また、BB I層の石器群のナイフ形石器には大きさや形態の異なるものが認められるが、「各遺跡ではそれぞれの要素が欠落するような状況で検出される場合が多い」（笹原 1995）と指摘されているように、石材やナイフ形石器の形態組成などの点で石器群間のばらつきが大きい。

（2）第3期後半の石器群

Sc I層直上とされる石器群からBB 0層、YLL層を出土層位とする石器群がこれにあたる。この段階の石器群は第3期前半に比して資料数が少ない。

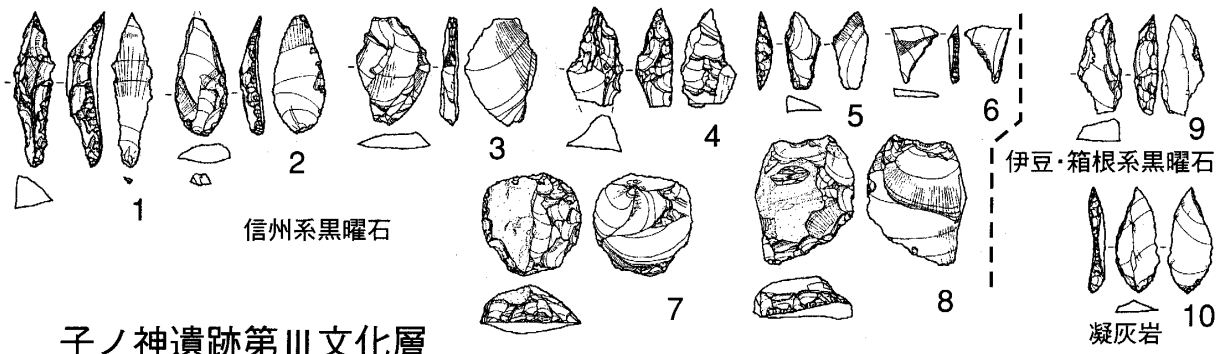
比較的まとまった資料としては、中見代第Ⅱ遺跡（沼津市教育委員会 1988）、子ノ神遺跡第Ⅲ文化層（沼津市教育委員会 1982）（図6 - 1～10）、上ノ池遺跡第Ⅱ文化層（静岡県埋蔵文化財調査研究所 1998）（図6 - 11～19）、西大曲遺跡（沼津市教育委員会 1980；鈴木 2002）（図6 - 20～29）、寺林遺跡第Ⅲ文化層（静岡県埋蔵文化財調査研究所 2003c）（図6 - 30～40）、中林山遺跡（三島

市教育委員会 2002) (図 6-41~45), 笹原後 F 遺跡 (三島市教育委員会 1994c) の資料が挙げられる。石器組成では角錐状石器, 切出形石器, 石刃製二側縁加工のナイフ形石器, そして厚手剥片素材の円形搔器が特徴的な段階であるが, 遺跡ごとに石器組成の変異が大きい。

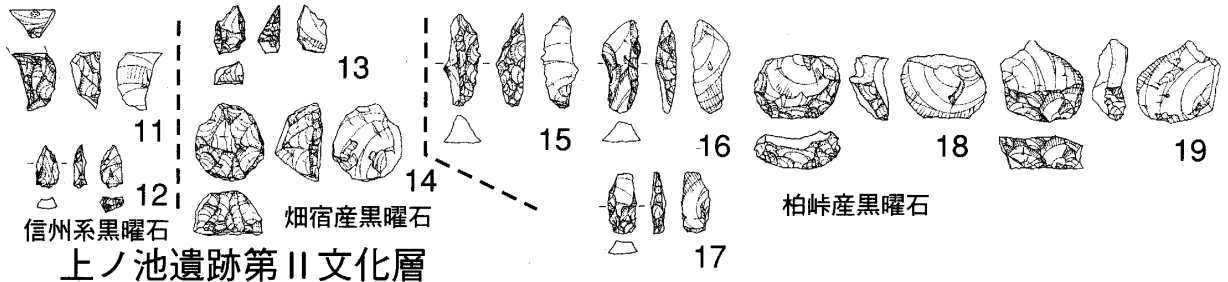
各石器群の出土層位は, 中見代第 II 遺跡, 子ノ神遺跡が Sc I 直上とされ, 上ノ池遺跡第 II 文化層は BB 0 層下位から上位を中心として出土したとされる。寺林遺跡第 III 文化層の石器群は休場層中から出土しており, 礫群のレベルは YLL 層から BB 0 上面に位置するという。中林山遺跡については, 石器群が第 I 文化層と第 II 文化層とに分けられるものとされ, いずれも休場層出土であることから第 4 期に位置づけられていた (前嶋 1995)。しかし, 石器群の内容は後出の第 4 期の石器群と比べると異質である。また, 例えば出土位置が重複する第 I 文化層の第 3 号ブロックと第 II 文化層の第 1 号礫群とは, 報告書掲載の分布図から判断する限り出土層準に大きな差はないようであり, 両者を同一文化層と捉えることも十分に可能ではないかと考えられる。その場合, 寺林遺跡第 III 文化層の石器群と共通する点が多く, 従って本稿では中林山遺跡休場層の石器群を一括してこの時期に属するものと捉えておく。同様に, 笹原後 F 遺跡の石器群も休場層出土であることから第 4 期に位置づけられてきた (前嶋 1995) が, 出土層位が休場層下層に偏っていること, 寺林遺跡や中林山遺跡のもの (図 6-34, 45) と類似するナイフ形石器の形態, 円形搔器の存在などからやはりこの時期に含められよう。また, 西大曲遺跡については休場層の石器群のうち, 集中部の遺存状態は悪いが石器群が古相の特徴を持つと考えられたブロック D を抽出したものであり, BB 0 層の石器群のうちでも相対的に出土層位は上位であると考えられる。出土層位からは, 中見代第 II 遺跡, 子ノ神遺跡, 上ノ池遺跡の石器群が古相に, 西大曲遺跡, 寺林遺跡, 中林山遺跡, 笹原後 F 遺跡の石器群が新相に, と 2 つに細分できる。

古相の石器群は切出形のナイフ形石器や角錐状石器, 搔器などから成る。搔器などは愛鷹・箱根第 3 期前半とほぼ同様である。ナイフ形石器や角錐状石器などの刺突具については第 3 期前半のように大形厚手品と小形薄手品とが作り分けられる傾向は見られなくなり, 総じて小形になる。

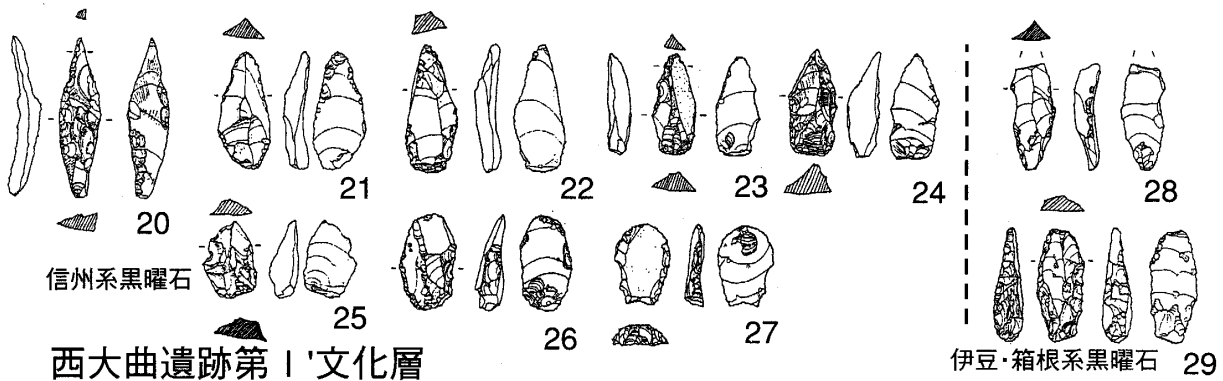
新相の石器群の寺林遺跡, 中林山遺跡では, 古相の石器群と同様に切出形のナイフ形石器がある。これに加え, 特に寺林遺跡では小形の石刃状剥片を素材とした尖頭形・涙滴形のナイフ形石器が纏まって出土している。これには基部に打面を残置し, 素材石刃の二側縁, 或いは基部・先端を加工したもの, 及びこれとは素材を逆に用い, 素材剥片の打面部を除去し先端とするものがある。石材は信州系黒曜石のものが多。笹原後 F 遺跡の折損したナイフ形石器も同様のものの可能性がある。そして西大曲遺跡の石器群 (図 6-20~29) はこの尖頭形・涙滴形のナイフ形石器が主体となっている。また, 西大曲遺跡, 寺林遺跡では尖頭器が出土している (図 6-20, 30, 32)。いずれも縦長剥片を縦位に用い, 平坦な剥離を加えたものである。基部に打面を残置した二側縁加工のナイフ形石器は一見するとこの後で第 4 期後半としている石器群のものに類似しているが, 両者は直接繋がるものではないであろう。寺林遺跡では石刃素材を逆位に用いるものが現れており, 第 3 期前半の古相から新相へと, 石器素材が石刃指向となっていく点では次の第 4 期前半とした石器群に



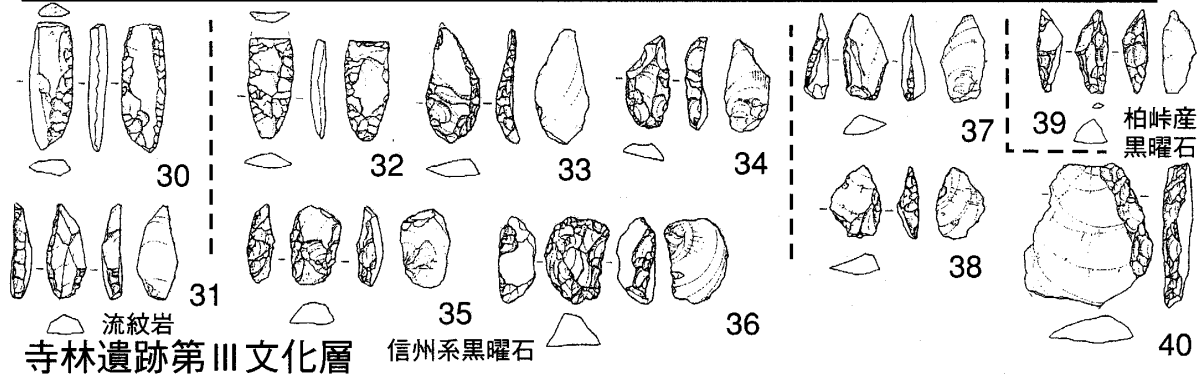
子ノ神遺跡第Ⅲ文化層



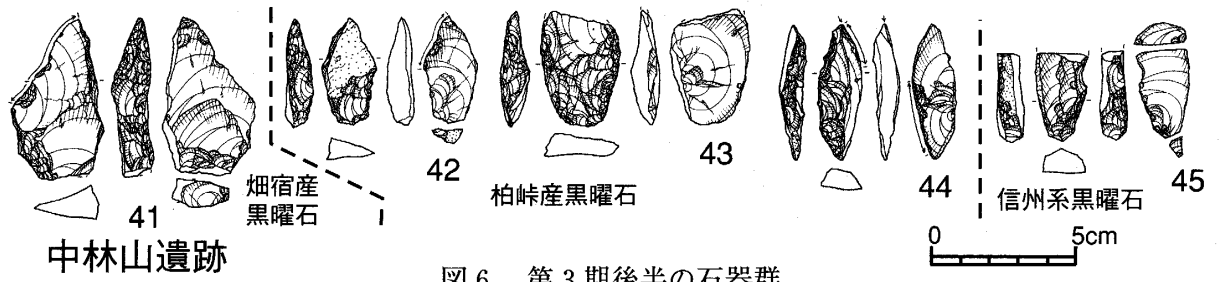
上ノ池遺跡第Ⅱ文化層



西大曲遺跡第Ⅰ'文化層



寺林遺跡第Ⅲ文化層



中林山遺跡

図6 第3期後半の石器群

繋がるものと考えられる。

3. 第4期

(1) 休場層の石器群

第4期の石器群は休場層を主な出土層位とする。休場層の石器群は、これ以前と異なり層位からその変遷を捉えることは困難である。「箱根・愛鷹山麓の旧石器時代編年」(静岡県考古学会 1995; 1996)では第4期は休場層下層(YLL)から上層(YLU)が相当するとされ、石器の型式的変化や器種組成と、出土層位とに基づいて段階a・b・cの3つに細分されている(前嶋 1995)。そして休場層の石器群ではおおよそ相模野台地と類似した変遷がたどれるものと考えられている(伊藤 1995; 1999)。しかし、実際の出土状況からこの変遷を捉えることは困難である。第4期に相当する石器群は休場層の中層(YLM)から上層(YLU)を中心としてその上下の層に及ぶ形で出土するものがほとんどで、しかも石器の型式的変化や器種組成の点から見ると別時期に属すると判断されるものがともに含まれている例がしばしば見られる。こうした石器群の文化層分離が試みられた事例も僅かにあり、例えば山中城三ノ丸第1地点(三島市教育委員会 1995)では、細石刃石器群、尖頭器石器群、ナイフ形石器石器群が3つの文化層に分けられているが、これら3者は平面分布上でほとんど重複しており、報文に示されている垂直分布からは層位差を見出しがたい。

筆者は、こうした第4期の石器群は、おおよそ前半・後半に分かれるものとして理解している(中村 2005)。前半と後半との石器群の内容差を示す例として観音洞G遺跡(三島市教育委員会 1994a)(図7)の石器群がある。この遺跡では、休場層で遺物集中部群が大きく第1地点と第2地点の2箇所に分かれて出土した。第1地点は第4期前半の石器群で、二側縁加工木葉形のナイフ形石器が主体となっており、これは信州産黒曜石を素材とするものが多い(図7-1~10)。これらのナイフ形石器は表裏の素材面の剥離痕構成から、一定方向に連続的に剥離された石刃が素材であると推定される。消費の進み小形化した石刃核も出土している。ナイフ形石器は石刃を逆位に用い、打面側を除去して尖頭部を作出したものが多い。一方、第2地点は第4期後半の石器群で、二側縁加工涙滴形のナイフ形石器、すなわち器体最大幅がより基部寄りやや幅広の傾向があり、基本的に円基の一群が主体となっている。これらは表裏の素材面の剥離痕構成から推定すると、石刃状の素材のみならず幅広のものや、或いは打面を一方向に固定しない打面転移石核による不定形剥片を用いたものなど、より一般的な剥片が素材となっている。また、素材打面側を基部とし、しばしば打面を残置する傾向があるのも特徴的である。石材は畑宿産黒曜石やチャートなどが用いられている(図7-11~18)。

尚、第1地点では休場層中層出土のものが主体となり上層では遺物の量が減少するが、第2地点では上層でも遺物量が安定しており、両地点の石器群の層位差を示すものかもしれない³⁾。しかし、観音洞G遺跡は箱根山麓でも高所に位置し、休場層の堆積が厚い。こうした条件の良い地点でも遺物全体の垂直分布から見て層位差が示される程度であり、従って層厚などの条件が落ちる遺跡では

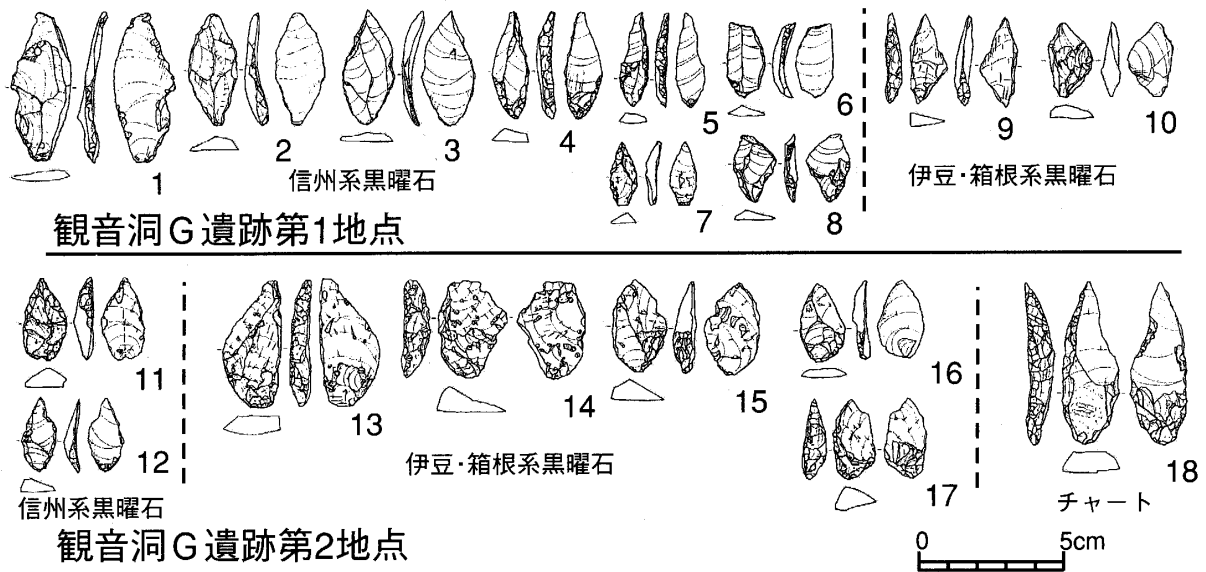


図7 観音洞G遺跡の石器群

両者は層的に分離できない状況となる。

休場層の石器群では、出土状況、石器群の型式学的特徴、利用石材などを加味して積極的にその分離の可能性を探ることが必要であり、そのためには母岩別資料を分類し、黒曜石を原産地別に把握するなど詳細な検討が必要であるが、風化・劣化の激しいホルンフェルスが多く用いられるなど解決困難な問題点も多い（池谷 1996）。そこで、さしあたっての対処法として以下の記述においては、幾つかの遺跡では分布上視覚的に認知でき、接合資料などで関連づけられない遺物集中部群を石器群の単位とした。

このように技術形態学的に異なる特徴をもつ幾つかの石器群を分離することにより、拙稿（中村前掲）では第4期の石器群の変遷を考察した。その変遷は以下のようにまとめられる。

（2）第4期前半の石器群

石刃を素材とする二側縁加工木葉形、一側縁加工、部分加工のナイフ形石器を中心とする石器群が第4期前半に位置づけられる（図8）。その他削器、搔器、彫器などの器種が見られ、これらも石刃が利用される割合が高い。素材石刃の剥離面構成や石刃石核の作業面の剥離痕を観察すると単設、或いは両設打面から連続的に石刃生産が行われていたと推測される。接合資料が乏しく剥片剥離技術の詳細を知ることは難しいが、石刃生産により石器素材を供給する効率的な石材消費が行われていたものと考えられ、また挟入削器や彫器といった特徴的な石器の存在から、西南関東の砂川期と対比できるものと考えられる。また、量的には少ないが、尖頭器も認められる（図9）。基本的に小形で剥片素材であり、石刃や石刃製作における余剰剥片を利用したものであろう。素材や加工の点でナイフ形石器と類似性の高いもの（図9-3, 6など）がある一方、尖頭器的な平坦加工を多用したナイフ形石器の例が初音ヶ原B遺跡（図8-11）や下原遺跡などにあり、二側縁加工木葉形のナイフ形石器と尖頭器との間に技術的・機能的連続性があったと考えられる。尚、西南関東

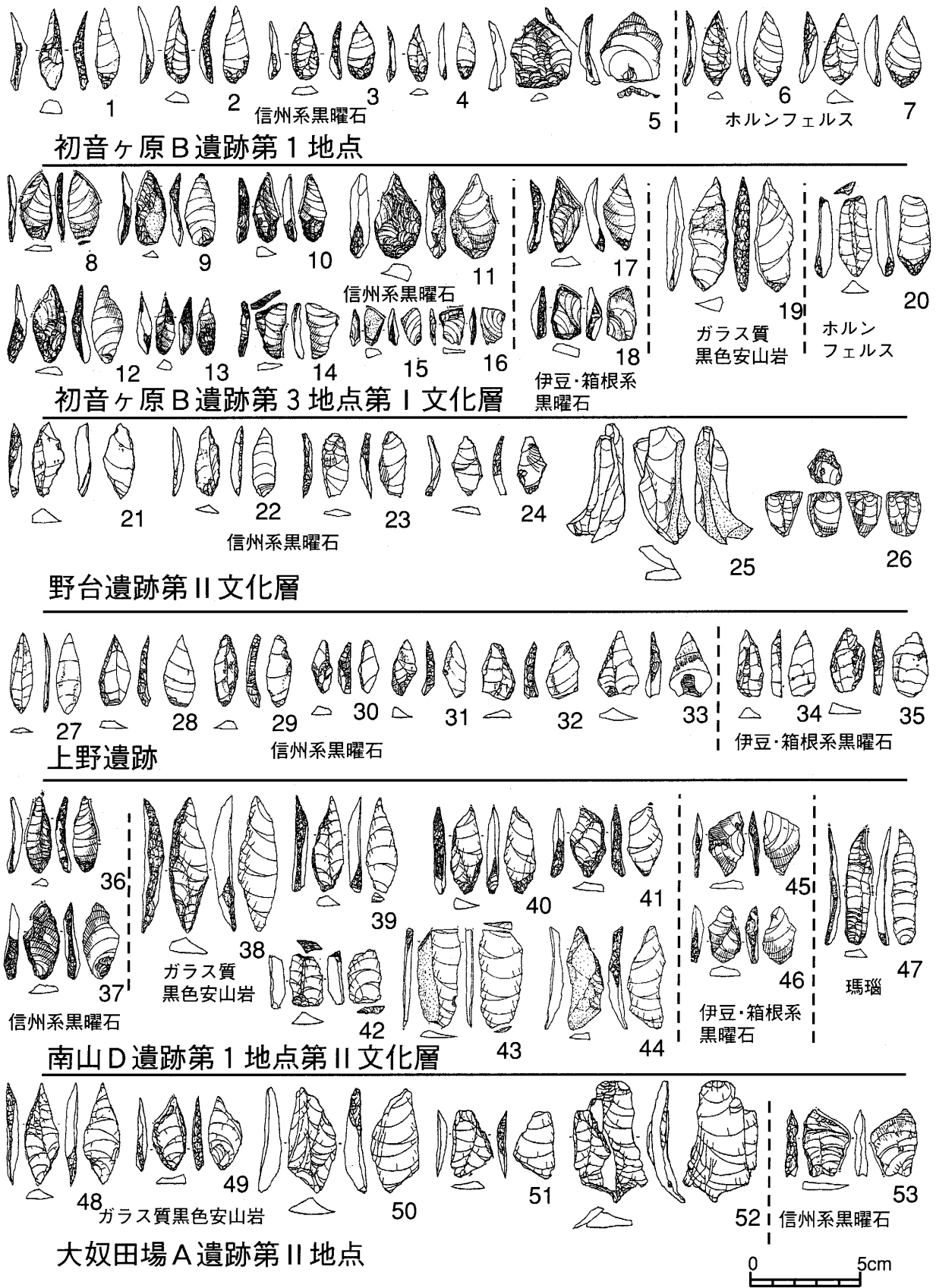


図8 第4期前半の石器群

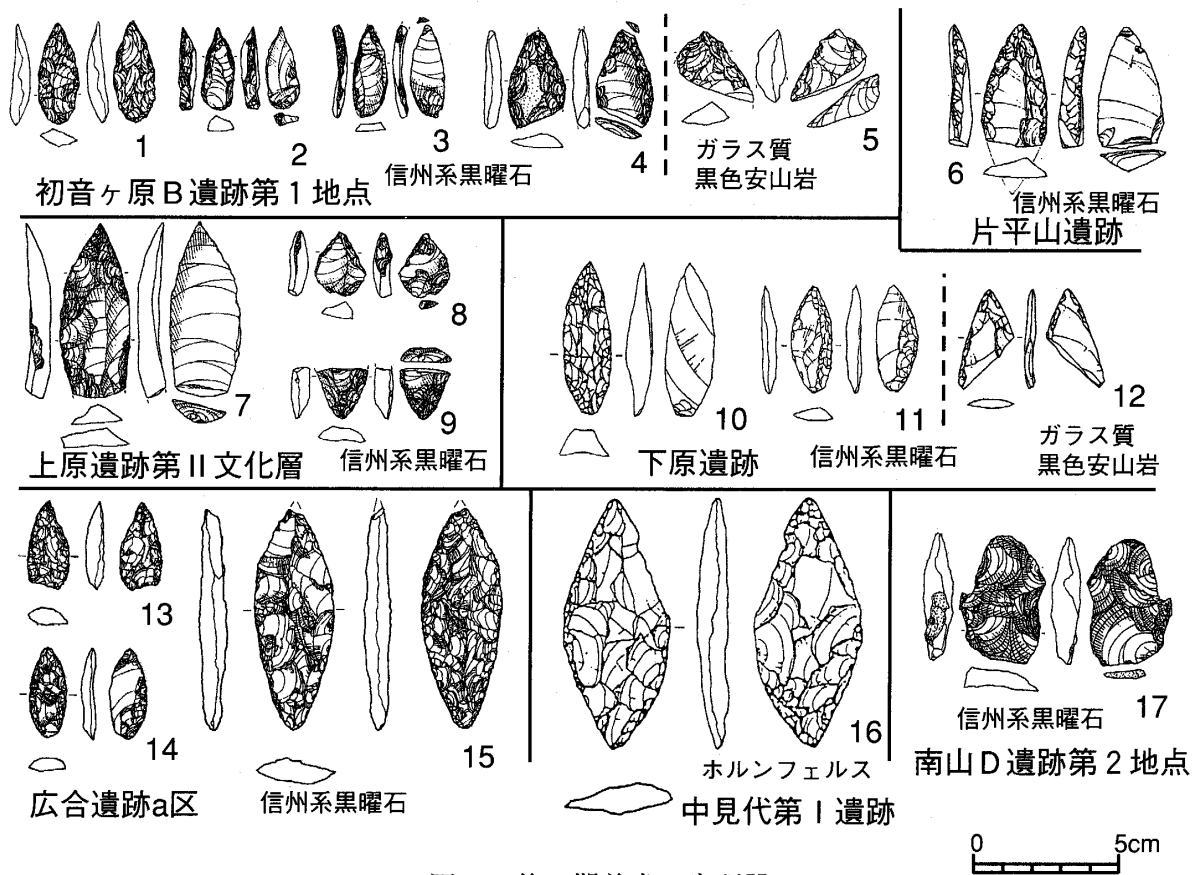


図9 第4期前半の尖頭器

では同時期に特徴的な石器とされる男女倉型有樋尖頭器は広合遺跡a区、中見代第I遺跡（図9-15, 16）などで出土しているが、出土例数は少なく、また遺跡内への搬入品である可能性が高い。

利用石材については、多くの遺跡でナイフ形石器は信州系黒曜石製である割合が高い傾向があり、次いでガラス質黒色安山岩、ホルンフェルスが用いられている。また、伊豆・箱根系黒曜石は相対的に少なくなっている。

この段階に位置づけられる遺跡には、広合遺跡e区（沼津市教育委員会 1991）、二ツ洞遺跡a区（同前）、土手上遺跡b・c区ブロック群1・2・5・6及び8号ブロック（沼津市教育委員会 1995）、上野遺跡（長泉町教育委員会 1979）、野台遺跡第II文化層（長泉町教育委員会 1986）、中尾遺跡第I文化層（同前）、初音ヶ原A遺跡第1地点（鈴木 1986）、同第2地点第I文化層（三島市教育委員会 1999）、初音ヶ原B遺跡第1地点（三島市教育委員会 1998b）、同第3地点第I文化層（三島市教育委員会 1999）、下原遺跡（静岡県埋蔵文化財調査研究所 1995；1998b）、片平山遺跡（三島市教育委員会 1990）、上原遺跡第II文化層（函南町教育委員会 2001）、南山D遺跡第1地点第II文化層（三島市教育委員会 2004）、大奴田場A遺跡第II文化層（函南町教育委員会 1989）などがある。

(3) 第4期後半の石器群

二側縁加工涙滴形のナイフ形石器や幾何形刃器、小形の尖頭器などが主体となる。石器群により様々な組成を示し、ナイフ形石器や幾何形刃器が主体となるものから尖頭器が主体となるものまで変異がある(図10・図11)。石材については、前段階ではあまり利用されなかった伊豆・箱根系黒曜石の割合が増加する。ナイフ形石器や尖頭器の石材としては、伊豆・箱根系黒曜石、信州系黒曜石、次いでガラス質黒色安山岩などが用いられる。石材により適用される剥片剥離技術が異なり、天台B遺跡の例に見られるように信州系黒曜石では石刃製作が、伊豆・箱根系黒曜石では石刃以外の一般的剥片生産が行われる傾向がある(図10-1~24)。

全体としては石刃以外の一般的剥片の割合が高くなっており、前段階のようにナイフ形石器を始めとする各種石器の素材の多くを石刃でまかなうような技術構造とは異なる。これには、利用石材の変化も大きく係っている。愛鷹・箱根第3期から第4期の石器群の特徴として、狩猟具は縦長剥片素材を利用する機会が多いという点がある。石材別に見ると、信州系黒曜石、柏峠産黒曜石、ガラス質黒色安山岩、ホルンフェルスなどを用いてナイフ形石器を製作する場合、基本的に縦長剥片素材であるが、これに対し、畑宿産黒曜石は石質の点からも縦長剥片の生産には適していなかったと考えられ、狩猟具への利用形態が異なる。すなわち、第3期前半では素材加工度の高い鋸歯縁加工のナイフ形石器や角錐状石器に多く用いられ、また石刃主体となる第4期前半では利用が減少する。第4期後半の一般的剥片を利用したナイフ形石器、尖頭器の増加は畑宿産黒曜石利用の増加と対応している。

この段階に位置づけられる遺跡には尾上イラウネ遺跡(沼津市教育委員会 1981)、尾上イラウネ北遺跡(沼津市教育委員会 1992)、拓南東遺跡(沼津市教育委員会 1998)、鉄平遺跡(静岡県埋蔵文化財調査研究所 2003a)、清水柳北遺跡東尾根(沼津市教育委員会 1989a)、八分平B遺跡(長泉町教育委員会 1981)、天台B遺跡(三島市教育委員会 1998)、八田原遺跡(静岡県埋蔵文化財調査研究所 1997)、北原菅遺跡(三島市教育委員会 1987)⁴⁾、陰洞E遺跡(三島市教育委員会 1994a)などがある。

(4) 尖頭器石器群

以上の他、山中城三ノ丸第1地点(三島市教育委員会 1995)、東山遺跡(三島市教育委員会 2004)、富士石遺跡群第2区(長泉町教育委員会 1989)などに見られるようなガラス質黒色安山岩、箱根産黒曜石などによる大形尖頭器を含む石器群がある。これらは相模野V期(鈴木・矢島 1978)の尖頭器石器群に対比されれば、ここで愛鷹・箱根第4期後半とした石器群に後続する段階のものと考えられる。しかし、纏まった資料のある遺跡は少なく、富士石遺跡群第2区以外は多時期にわたる石器群が混在している可能性が高いものであり、資料的な制約が大きい。第4期後半とした石器群や細石刃石器群とどの程度時間的に重複するのか、或いは分離されるのか確定が難しく、詳細な検討は今後の課題としたい。

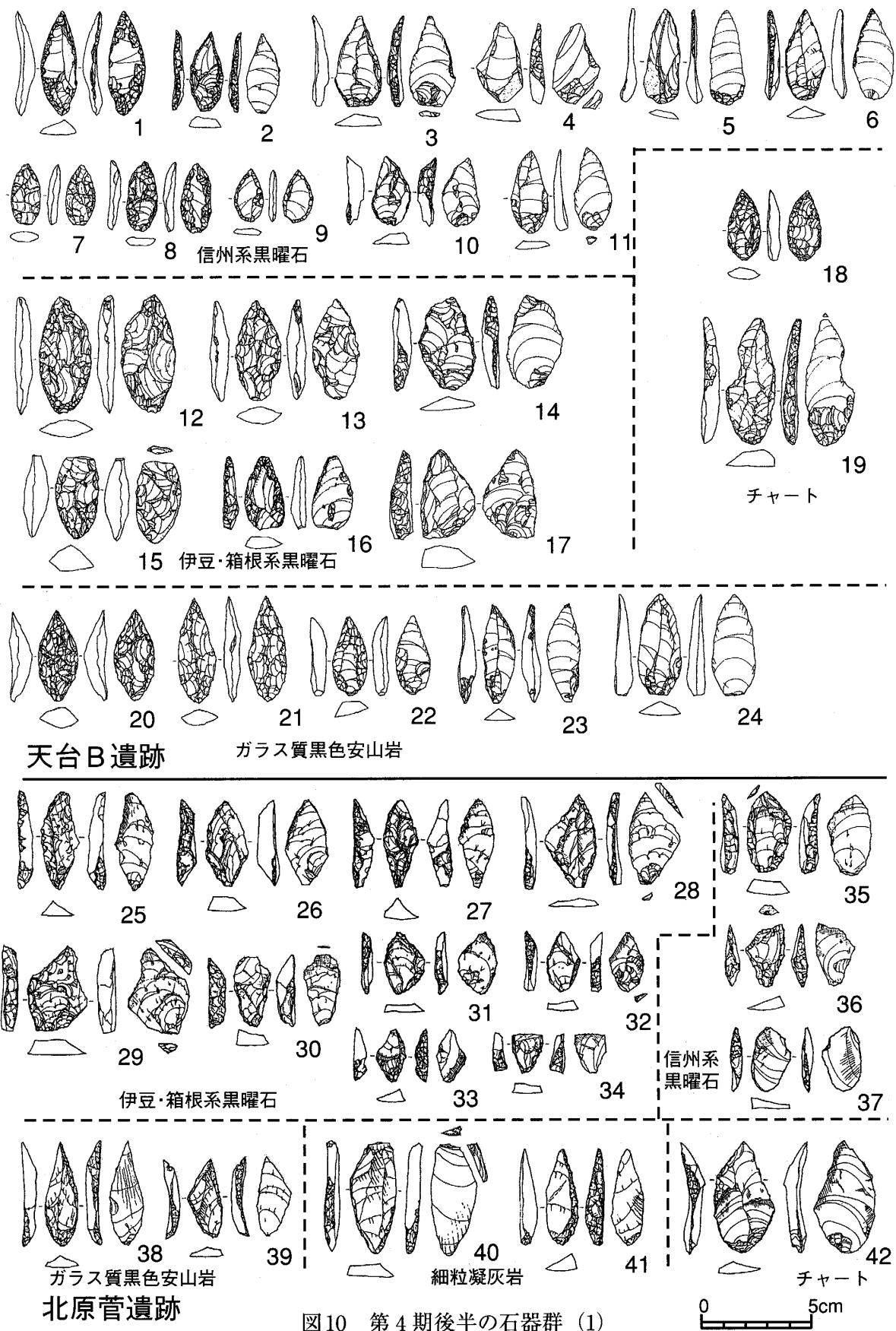


図10 第4期後半の石器群 (1)

後期旧石器時代後半期の居住形態の地域的様相

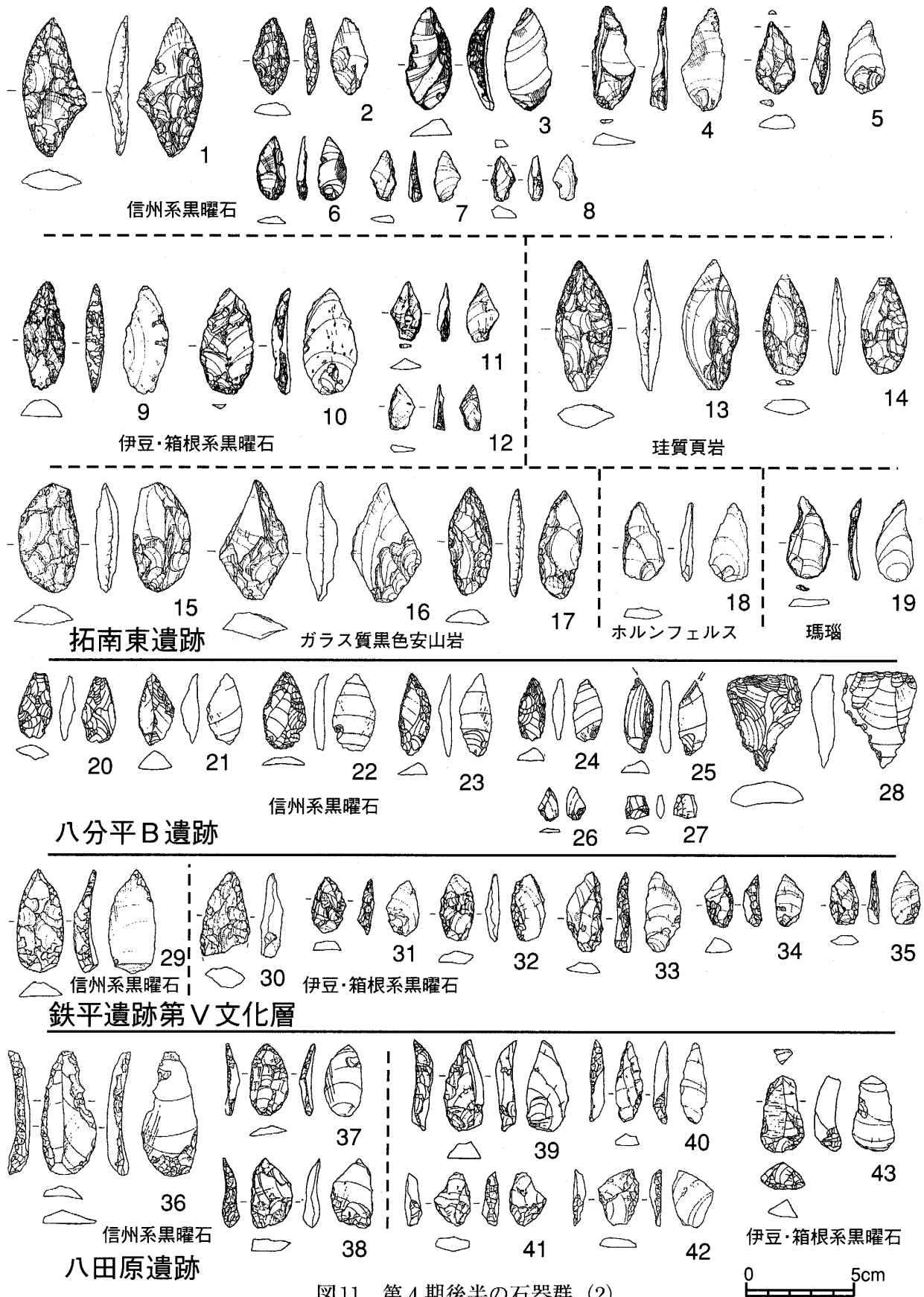


図11 第4期後半の石器群 (2)

4. 箱根東麓の石器群

以上では愛鷹南麓から箱根西麓における石器群の変遷を述べてきたが、これに隣接する箱根東麓の熱海市大越遺跡（武蔵考古学研究所 1995）の石器群についても述べておきたい。大越遺跡は、箱根西麓の遺跡群から見るとちょうど分水嶺を越えた反対側にあたる、標高231mから242mの舌状台地に位置し、箱根東麓では現在知られている唯一のまとまった資料をもつ遺跡である。

この遺跡では断続的に存在するⅣ層の赤色スコリア層を挟んでⅢ層からⅤ層にかけて石器約6000点が出土しており、大小28のブロック（石器集中部と礫群）として捉えられている。この石器群は、報文では7期に細分されているが、愛鷹南麓、箱根西麓の石器群の変遷とは対照されていない。また、ローム層の堆積が愛鷹南麓・箱根西麓より薄く、層位の対応関係も不明である。そこで報文に示されているブロック間の層位差と石器群の内容とをもとに愛鷹南麓・箱根西麓の石器群と対比すると、Ⅴ層出土とされる石器群がBB 0層の石器群と、Ⅲ層を中心に出土している石器群が休場層の石器群と対応するものと考えられる。定型的な石器に乏しく時期判別の困難なブロックを除くと、次のように整理することができる。

①第3期後半に相当する石器群

3 b, 4 bブロックのものがこれに当たり、いずれもⅤ層出土とされ、後述の②～⑤の石器群より層位的に下位に位置する。3 bブロック（図12-1～6）では基部側に最大幅をもつ涙滴形のナイフ形石器と、ほぼ同形の尖頭器が出土しており、また、4 bブロックはこの時期に特徴的な厚手の円形搔器が出土している。Ⅴ層下部出土とされる5 bブロックもこの一群に含まれる可能性がある。

②第4期前半に相当する石器群

2 b, 20, 26, 28ブロックが含まれるが、それぞれの内容は均質ではない。2 bブロックはガラス質黒色安山岩製の石刃製二側縁加工ナイフ形石器、畑宿産の石刃製二側縁加工、幾何形ナイフ形石器から成る（図12-12～16）。26, 28ブロックはガラス質黒色安山岩のナイフ形石器が主体となっている（図12-7～11）。20ブロックはガラス質黒色安山岩とともに信州産黒曜石のナイフ形石器が加わる。この他、11ブロックはナイフ形石器が欠損品のみだがこのグループに含まれる可能性がある。

また、7ブロックではガラス質黒色安山岩製及び黒曜石製のナイフ形石器、尖頭器が出土しているが、両面調整尖頭器の存在や、信州産黒曜石の形態がグループ②とは異なることからむしろ③に含めるべきかもしれない。

③第4期後半に相当する石器群

9, 10, 16, 22, 24ブロックの石器群で、涙滴形のナイフ形石器、幾何形刃器と小形尖頭器との組み合わせが見られる（図12-17～35）。

④尖頭器を主体とする石器群

8, 13 a, 17 a, 18ブロックがこれに当たる。これらの石器群では大小の尖頭器と涙滴形の

後期旧石器時代後半期の居住形態の地域的様相

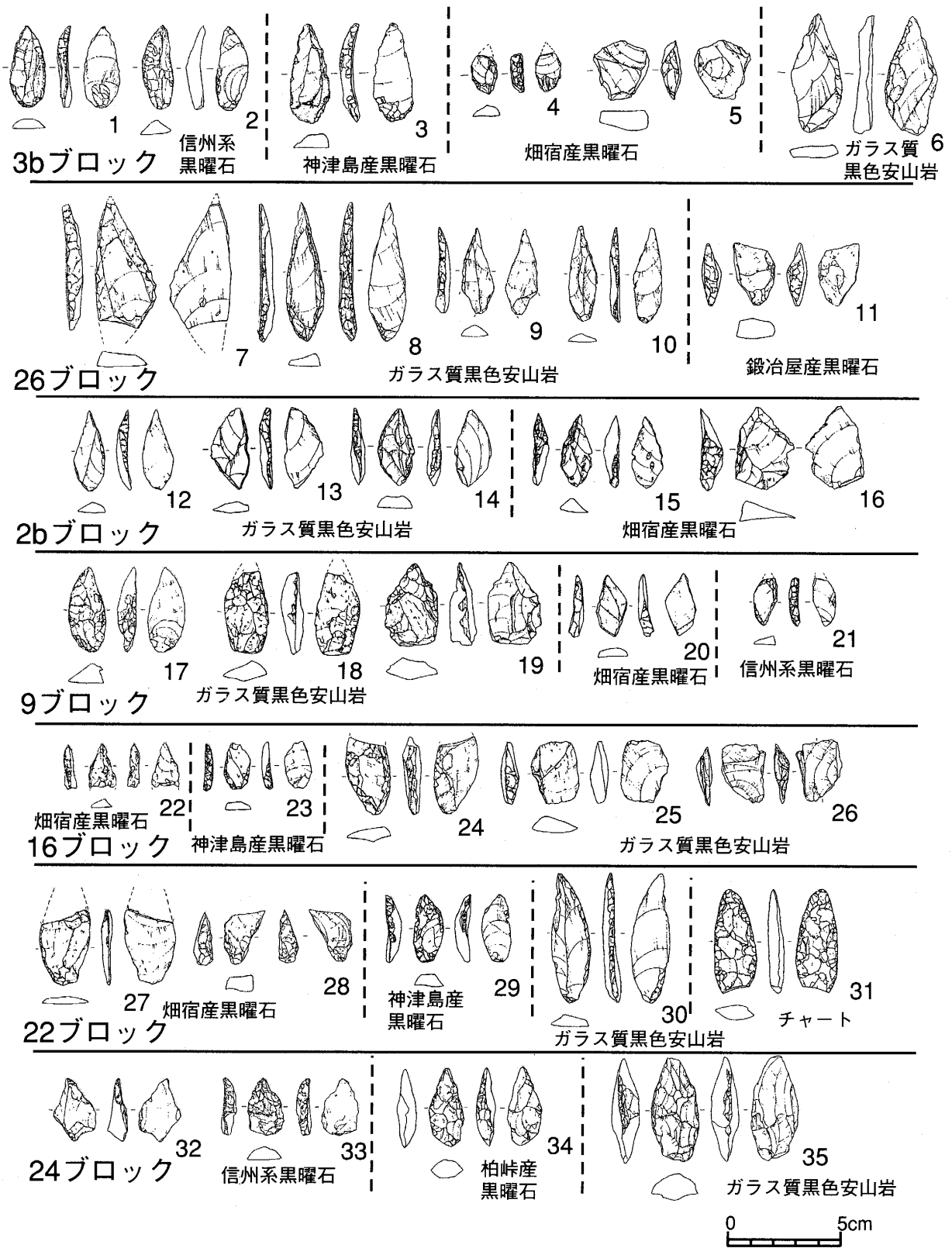


図12 大越遺跡

ナイフ形石器，幾何形刃器とが共伴する。

⑤細石刃石器群

細石刃核が出土している4 aブロックがこれに当たる。

ここで挙げた石器群についても，愛鷹南麓，箱根西麓と同様，④の尖頭器石器群の位置づけを確定できないが，第3期から第4期前半，後半については同様な変遷をたどるものと理解される。

以上，愛鷹南麓，箱根西麓・東麓にわたって，第3期から第4期にかけての石器群の変遷を整理した。愛鷹南麓から箱根西麓，箱根東麓にかけてほぼ同様な変遷がたどれ，第3期，第4期ともに前半と後半との2時期に細分される。

IV. 石材消費と遺跡群の構造との変遷

1. 第3期前半

以上にまとめた石器群の変遷に従って，遺跡群の変遷から居住形態の変化について検討する。

石器群の変遷について触れた際に，BB I層の石器群では遺跡ごとに個々の要素が欠落するような石器組成を示すことを述べたが，遺跡の石器集中部の内容を見ていくとさらにその傾向が明瞭に現れてくる。まず石材消費の面では，1つの遺跡で原石や石核を搬入して素材生産が行われる石材が特定のものに偏る傾向がある。これはBB I層下部の石器群でもBB I層中部から上部の石器群でも同様な傾向を示す。当該期の石器群における石器組成を表1に示した。これを見ると，黒曜石などは一部の遺跡で集中的に消費されている状況が分かる。

伊豆・箱根系黒曜石が中心に消費された遺跡としては上ノ池遺跡，子ノ神遺跡などがある。上ノ

表1 第3期前半の石器群の石器・石材組成

遺 跡 名	ナイフ形石器類				搔器・削器など				剥 片 類				石 核			
	Ob	GAn	Ho	他	Ob	GAn	Ho	他	Ob	GAn	Ho	他	Ob	GAn	Ho	他
陣場上B-I文	35	1	1	1	69	0	0	0	4768	43	52	11	0	0	3	0
子ノ神-II文	18	0	0	0	6	0	0	2	657	2	15	0	0	0	0	0
桜畑上	1	1	2	0	3	0	0	0	392	178	9	11	3	0	0	0
上ノ池-III文	6	0	2	0	31	1	3	1	1217	21	74	7	8	0	1	1
拓南東-II文	0	0	0	1	0	0	0	0	47	1	5	1	0	0	0	0
広合 (b・c・d区)	1	0	0	0	1	0	0	0	1	1	32	0	0	0	2	0
清水柳北東尾根1~4号ブロック	1	0	0	0	0	0	0	1	22	14	6	0	0	0	0	0
清水柳北東尾根6・7号ブロック	2	0	0	0	2	0	0	0	177	9	273	75	0	2	0	3
清水柳北東尾根5号ブロック	0	0	0	0	0	0	0	0	24	1	1	0	0	0	0	0
清水柳北東尾根9号ブロック	0	0	0	0	2	0	0	0	12	0	0	0	0	0	1	0
中見代第I-II文	1	1	7	2	2	0	1	1	71	7	185	2	0	0	6	0
中見代第II	1	0	1	0	2	0	0	0	36	1	13	2	1	0	1	0
中見代第III	0	0	2	0	0	0	0	0	14	0	5	0	1	0	0	0
土手上 (b・c区)	0	0	1	0	5	0	0	0	155	0	1	0	1	0	0	0
鉄平-III文	1	0	1	0	0	1	0	0	47	1	23	2	0	0	0	0
尾上イラウネ北2~5号ブロック	0	0	1	0	8	1	1	0	42	2	48	2	1	0	0	1
八田原BBI	0	0	0	0	5	0	0	0	86	4	9	0	1	1	0	0
加茂ノ洞B	0	0	1	0	7	0	0	0	10	2	1	0	0	0	0	0

後期旧石器時代後半期の居住形態の地域的様相

池遺跡第Ⅲ文化層の石器群は畑宿産黒曜石の割合が高く、この他柏峠産黒曜石、細粒凝灰岩、ホルンフェルスなどにより小規模な剥片剥離が行われている。但し、畑宿産黒曜石は51の母岩に分類されているが、石核を含むのは3母岩のみである。

子ノ神遺跡第Ⅱ文化層の石器群は大半が柏峠産の黒曜石から成り、信州系黒曜石など他の石材は僅かに搬入されているのみである。柏峠産黒曜石については、原礫面を残す資料も多いが石核は出土していない。だが、剥片類はかなり小形のものから成り、小形の原石が消費しつくされた状況を示すものと考えられる。

また、陣場上B遺跡の石器群もほとんどが黒曜石から成る偏った石材組成を示す。剥片類まで全点を観察できていないので正確には分からないが、ナイフ形石器、搔器、楔形石器などはほとんどが信州系黒曜石であることから全体でもほとんどが信州系黒曜石であったと予想される。搔器が楔形石器に転用されていることや小形になった石核がさらに分割されたことを示す接合資料などからはやはり石材が消費しつくされた状況が窺える。

桜畑上遺跡でも畑宿産黒曜石による剥片剥離が行われた石器集中部がある。厚手の剥片が剥離されており、搔器などの素材生産であった可能性がある。これに対し、ホルンフェルス製のナイフ形石器などが搬入されている。

一方、中見代第Ⅰ遺跡では、ホルンフェルスによる剥片剥離が行われている。小形二側縁加工のナイフ形石器にはホルンフェルス製のものと黒曜石製のものとが見られるが、全体の石材組成もほとんどがホルンフェルスと黒曜石とで占められる。ホルンフェルスは石刃や石核などがあり、素材生産が行われたと見られる。一方、黒曜石は恐らくほとんどが信州系であるが、ナイフ形石器等を除くとほとんどが細かい碎片類であり、石器の二次加工などが行われたのみのようである。

以上の遺跡に対し、小規模な石材消費しか認められない遺跡も存在する。

尾上イラウネ北遺跡第Ⅱ文化層2～5号ブロックの石器群は、小規模な集中部の集まりで石器総数100点余りである。報文に図示はされていないがホルンフェルス製石刃の接合資料がある。

広合遺跡（b・c・d区）では、黒曜石製のナイフ形石器破片や搔器が出土しているが、遺跡内で剥片剥離が行われているのはホルンフェルスである。

この他、箱根山麓の八田原遺跡、或いは石材組成の詳細なデータはないが小平C遺跡、天台B遺跡、観音洞G遺跡などもこうした小規模な遺跡として位置づけられる。

このように、第3期前半の石器群では石材の消費規模から見ると、多数の原石や石核から素材生産が行われる大規模な遺跡と、ナイフ形石器や搔器が搬入され剥片生産は僅かに留まる小規模な遺跡と、大まかに分けて2者がある。前者の遺跡については消費石材が産地ごとに偏る傾向がある。黒曜石は信州系・伊豆・箱根系に係らず限られた遺跡のみで素材生産が行われている。一方、後者の遺跡では、黒曜石製の石器などは搬入品として存在し、僅かな二次加工が行われるのみで、これに主にホルンフェルスによる小規模な剥片生産が伴っている。特に、この時期に特徴的な搔器類は黒曜石製のものが搬入品として存在する遺跡が多く、刃部再生を繰り返しながら利用された管理的

石器 curated tool (Binford 1977) としての性格が強い。尚、剥片剥離技術については、いずれの石材でも縦長剥片が製作され、それがナイフ形石器の素材に利用される傾向があるが、幅広剥片の製作も行われており、搔器類などに多く用いられている。尚、石材の消費規模はほぼ遺跡規模とも対応している。石材消費が小規模な遺跡は石器集中部や礫群が1～3程度から成り、小範囲に収まるものがほとんどであるが、大規模な遺跡は遺物の分布範囲も広くなり、子ノ神遺跡や陣場上B遺跡、上ノ池遺跡は5～6の大規模な石器集中部から成る。但し石器集中部に伴う礫群が発達した遺跡は少ない。例外的に中見代第I遺跡では17基の礫群が連続的に分布しているが、その他の遺跡では礫群の数、その構成礫数ともに少ない。このことから各遺跡の利用期間は短く、また回帰性が低かったと推測できる。

また、石器組成について、当該期のナイフ形石器には小形のナイフ形石器と、大形基部加工のナイフ形石器、後半に入るとさらに二側縁鋸歯縁加工のナイフ形石器・角錐状石器が加わることをさきに述べたが、前者の小形ナイフ形石器と大形基部加工及び二側縁鋸歯縁加工のナイフ形石器・角錐状石器とは製作の機会が異なっていたようである。石材では小形ナイフ形石器の一群には柏峠産、及び信州系の黒曜石、ホルンフェルスなどが用いられるのに対し、大形基部加工のナイフ形石器にはホルンフェルスが、二側縁鋸歯縁加工のナイフ形石器には畑宿産黒曜石、ホルンフェルスが用いられる傾向があるようである。

遺跡ごとのナイフ形石器の組成を見ると、子ノ神遺跡(図3-1～11)、陣場上B遺跡(図3-12～23)、中見代第I遺跡(図5-5～12)などは小形のナイフ形石器のみがまとまっている。一方、尾上イラウネ北遺跡では大形基部加工のみであり、上ノ池遺跡第Ⅲ文化層(図4-1～9)では二側縁居歯縁加工のナイフ形石器が製作され、ほぼ同様の加工で角錐状石器も製作されているようだが小形ナイフ形石器はない。イラウネ遺跡第Ⅱ文化層では小形ナイフ形石器と鋸歯縁加工及び基部加工の大形ナイフ形石器との両者が出土しているが、集中部別に見ると両者の分布は南北に分かれ、北側の1～3号ブロック(図4-17～21)では小形ナイフ形石器が、南側の4, 5号ブロック(図4-10～16)では大形基部加工、二側縁鋸歯縁加工のナイフ形石器が出土している。中見代第Ⅲ遺跡(図5-1～4)では鋸歯縁加工のナイフ形石器と薄手の二側縁加工のナイフ形石器とが地点を違えて出土している。このように両者は別々の遺跡で出土する傾向が強く、両方が出土している遺跡でも出土地点が分かっていたり、或いは少なくとも一方が搬入品であったりする。ホルンフェルスの大形剥片が出土する遺跡はBB I層下部から多数存在するが、それに比してホルンフェルス製の大型基部加工のナイフ形石器が出土する遺跡は限られている。

この時期の石器群については、大小のナイフ形石器2者が二極構造を成していたと捉えられる。

2. 第3期後半

この時期の石器群については遺跡数が少ないため、前後の段階と比べてパターン抽出が難しい。石材は基本的に黒曜石が多用され、信州系主体の石器群と伊豆・箱根系主体の石器群とがある。前

段階と同様、石材の消費規模からは、多数の原石や石核から素材生産が行われる大規模な遺跡と、製品が搬入され剥片製作は僅かに留まる小規模な遺跡との2者がある。

伊豆・箱根系黒曜石の集中的消費地点としては上ノ池遺跡第Ⅱ文化層がある。また、子ノ神遺跡第Ⅱ文化層では信州系黒曜石の集中的消費が行われている。黒曜石は接合資料や石核の存在から、原石段階で搬入されていることが分かる。

寺林遺跡第Ⅲ文化層でも伊豆・箱根系黒曜石やホルンフェルスによる小規模な剥片剥離が行われたようであるが、信州系黒曜石など多くの製品石器は搬入されたものと考えられる。この他、中見代第Ⅱ遺跡、中林山遺跡、笹原後F遺跡なども石器の搬入やその二次加工により形成されたものと見なせる。

前段階と同様、各石器群では同種石材で縦長剥片から幅広剥片まで多様な素材生産が行われている。縦長剥片は尖頭形のナイフ形石器や角錐状石器に、幅広剥片は切出形石器、幾何形刃器や搔器類などに用いられる傾向がある。一方、第3期前半の石器群におけるような大小のナイフ形石器による二極構造は第3期後半では認められなくなるようである。

また、遺跡の構成にも変化が認められる。前段階に比べて礫群の発達した遺跡が多くなり、石材の消費規模が小さい遺跡でも、寺林遺跡、中見代第Ⅱ遺跡などは多数の礫群が広範囲に分布している。前段階に比して長期間の、或いは回帰的な遺跡利用が始まったものと考えられる。

3. 第4期

第4期の石器群における石材消費の変遷についてはすでに論じているが(中村 2005)、それは以下のようにまとめられる。

第4期前半の石器群では、いずれの石器群においても石材は黒曜石、ガラス質黒色安山岩、ホルンフェルスの3種で大半を占めるが、ナイフ形石器では信州系黒曜石の割合が高い遺跡が多いのに対し、剥片では相対的に黒曜石の割合が低くなり、さらに石核では黒曜石の割合が極端に少なく、ホルンフェルスやガラス質黒色安山岩(特にホルンフェルス)の割合が多い(表2)。これは、石材ごとの供給頻度と消費のされ方とによるものである。黒曜石では信州系のものがより管理的な石器に利用され、また吝嗇的に消費される傾向が強く、これに対しホルンフェルスなどは相対的に臨機的な石器への利用に留まり、剥片が大量生産されながらもナイフ形石器の製作には結びついていない。信州系黒曜石は Staging strategy (Binford and O'Connell 1984) (工程別異所戦略(佐藤 1995)、段階的な石材消費・石器生産戦略(田村 1998)などと訳される)により消費されており、第3期前半では黒曜石については素材生産地点と石器搬入地点とが分離していたが、第4期前半では消費段階がよりゆるやかに分離した形で段階的消費が行われている。これに対しガラス質黒色安山岩やホルンフェルスは、信州系黒曜石の減少を補う形でナイフ形石器に用いられていたものと考えられる。

第4期後半の石器群では、全体の石材組成に占める黒曜石の割合が増加し、ホルンフェルスなど

表2 第4期前半の石器・石核・剥片類組成

註：「-」は石材別のデータなし

遺 跡	ナイフ形石器				尖 頭 器				石 核				剥 片			
	Ob	GAn	Ho	他	Ob	GAn	Ho	他	Ob	GAn	Ho	他	Ob	GAn	Ho	他
下原	89	4	13	0	6	2	1	0	4	9	27	4	981	57	447	29
片平山	16	1	3	0	1	0	0	0	4	1	0	0	890	2	15	8
上原Ⅱ文	73	15	17	10	0	0	0	0	0	1	17	1	466	104	600	55
初音ヶ原A 第1地点	12	0	0	0	0	0	1	0	4	0	0	0	561	4	12	4
初音ヶ原A 第2地点 I文	35	2	3	2	0	0	0	0	1	3	16	2	150	34	186	21
初音ヶ原B 第1地点	17	1	2	0	0	0	0	0	3	0	1	2	76	0	1	0
初音ヶ原B 第3地点 I文	75	5	13	5	6	1	0	0	5	4	24	9	396	65	506	142
二ツ洞a区	41	18	15	5	4	1	0	0	9	11	36	2	299	157	539	29
広合e区ブロック群D	40	0	7	0	6	0	1	0	3	0	10	0	166	8	286	6
土手上b・c区 ブロック群2	40	2	1	0	2	0	0	0	1	0	7	1	286	7	52	9
上野	35	1	0	1	0	0	0	0	3	0	0	1	-	-	-	-
野台Ⅱ文	107	3	6	5	0	0	0	0	18	14	41	4	-	-	-	-
中尾Ⅰ文	30	3	0	3	0	0	0	0	3	1	10	1	-	-	-	-
観音洞G 第1地点	23	0	2	0	0	1	0	1	-	-	-	-	-	-	-	-
広合a区北A群	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	4	0	7	6	92	3
広合a区北B群	3	2	6	3	0	1	1	0	1	3	7	0	91	14	534	47
広合a区南A群	6	0	2	1	0	0	0	0	1	0	6	0	59	13	406	13
広合a区南B群	10	0	1	1	0	0	0	0	0	1	6	1	54	8	224	4
広合a区南C群	4	0	3	1	0	0	1	0	0	0	10	0	7	5	161	4
広合a区西B群	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	10	0	30	0
広合b・c・d区ブロック群A	6	0	1	1	0	0	0	0	0	0	2	0	31	2	16	1
広合b・c・d区ブロック群C	3	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	0	70	0
広合e区ブロック群E	3	0	2	0	1	0	0	0	0	0	18	0	21	2	134	0
広合e区ブロック群F	2	2	2	0	0	0	0	0	0	1	4	0	4	7	54	0
土手上b・c区 ブロック群1	4	3	1	0	0	0	0	0	0	0	3	1	15	6	29	3
土手上b・c区 ブロック群5	3	0	7	0	0	0	0	0	1	1	8	0	3	1	153	4
イラウネⅢ文	14	0	1	1	4	1	0	0	5	0	13	5	-	-	-	-
陣場上BⅡ文	19	1	2	1	0	0	0	0	7	0	23	4	0	0	2	1
山中城跡三ノ丸第2地点	4	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	30	0	0	5
南山D 第1地点Ⅱ文	26	17	0	4	0	0	0	0	0	1	1	0	99	225	84	43
南山D 第2地点	11	3	0	3	1	0	0	1	4	0	0	0	63	13	11	32
大奴田場A	1	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	51	0	2
土手上b・c区 B6	0	0	10	4	1	0	1	0	1	3	7	0	16	7	81	7
土手上b・c区 8号ブロック	0	0	8	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	71	0
広合b・c・d区ブロック群B	6	0	13	0	0	0	0	0	0	0	11	0	40	3	331	0

他石材を凌駕するようになる。この時期の石器群の石材組成は表3に示した。天台B遺跡、中村分遺跡、北原菅遺跡など、黒曜石が石器、石核、剥片類とも突出して多い黒曜石の大量消費が行われた遺跡が特に箱根西麓の比較的標高の高い位置に多く現れる。これらの遺跡で主に消費されている黒曜石は伊豆・箱根系のもので、こうした遺跡では箱根産黒曜石の原石をまとめて搬入し、石器製作が行われていたものと見られ、多数の石器集中部が形成されていることから黒曜石の補給と関連して回帰的に利用された遺跡と考えられる。こうした遺跡を起点として、石器や石核が搬入され石器製作・再加工が行われた中間的消費地点の遺跡、製品が搬入され石器製作の痕跡に乏しい遺跡が愛鷹・箱根山麓に広く展開しており、伊豆・箱根系黒曜石が段階的な石材消費戦略のもとに消費されていたことが分かる。一方、信州系黒曜石については、消費量自体は目立たないが、第4期前半に比して大きく減少したとは言えないであろう。天台B遺跡、拓南東遺跡、尾上イラウネ遺跡、八分平B遺跡などが信州系黒曜石による石器製作が行われた遺跡として挙げられるが、相対的に剥片数量が少なく、石核も各遺跡に1～数点程度のみという状況は前段階同様、高い管理性の下で消費

後期旧石器時代後半期の居住形態の地域的様相

表3 第4期後半の石器・石核・剥片類組成

註：「-」は石材別のデータなし

遺 跡	ナイフ形石器				尖 頭 器				石 核				剥 片			
	Ob	GAn	Ho	他	Ob	GAn	Ho	他	Ob	GAn	Ho	他	Ob	GAn	Ho	他
天台B YLU-YLM	130	17	1	50	74	52	8	18	31	10	6	10	7679	2137	215	1131
中村分	28	2	2	0	10	0	1	0	17	2	1		1704	177	12	17
北原菅	71	11	0	5	1	0	0	0	12	5	4		940	185	37	26
八田原	23	0	1	2	3	0	0	1	0	0	1	1	459	20	61	15
陰洞E A群	77	11	3	6	0	0	0	2	-	-	-	-	-	-	-	-
陰洞E B群	66	11	0	1	0	0	1	0	-	-	-	-	-	-	-	-
観音洞G 第2地点	32	6	0	5	0	1	0	1	-	-	-	-	-	-	-	-
清水柳北 東尾根 6号ブロック群	4	0	0	0	4	0	0	0	2	0	14	2	1151	108	304	11
清水柳北 東尾根 10号ブロック群	10	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	2	1722	1	3	2
拓南東	62	5	9	8	21	17	3	3	7	2	32	3	434	172	875	149
尾上イラウネ北 Gブロック群	24	1	6	1	20	0	0	0	8	1	15	0	418	2	153	5
鉄平	8	0	0	0	19	1	0	4	1	0	0	0	132	4	5	3
八分平B	4	0	1	1	14	0	0	0	3	0	0	0	142	2	1	7
尾上イラウネ北 Aブロック群	18	0	0	0	5	1	0	1	11	0	5	0	102	4	128	3
尾上イラウネ北 Bブロック群	23	0	2	0	3	0	1	0	2	0	3	1	174	2	39	7
尾上イラウネ北 Cブロック群	21	0	1	4	8	0	1	0	0	2	0	3	176	3	34	14
尾上イラウネ北 Dブロック群	5	0	1	0	3	2	2	0	4	1	6	1	47	19	73	2
尾上イラウネ北 Eブロック群	28	0	2	3	9	0	0	0	0	6	2	0	163	18	33	14
尾上イラウネ北 Fブロック群	15	0	0	0	3	0	0	0	1	0	3	1	96	5	34	3
台崎C	5	2	0	0	2	0	0	0	1	0	0	0	139	6	1	0
柳沢C Ⅲ文	26	1	1	1	1	0	0	0	4	1	2	1	214	8	8	10
土手上b・c区 ブロック群4	11	0	1	0	1	0	0	0	0	0	6	1	48	7	61	2
西洞(b区-1)	13	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	11	2	20	1
稲荷林	9	0	0	0	2	0	0	0	1	0	1	0	69	0	2	0
清水柳北 東尾根 1号ブロック群	2	0	0	0	2	1	0	1	0	0	0	0	8	0	0	0
清水柳北 東尾根 3号ブロック群	8	1	0	0	0	0	0	0	0	4	3	0	21	56	8	1
清水柳北 東尾根 4号ブロック群	4	1	0	0	1	0	0	0	1	2	0	0	44	48	34	2
清水柳北 中央尾根 1号ブロック群	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	15	1	3	0
清水柳北 中央尾根 2号ブロック群	4	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	21	0	0	0
清水柳北 中央尾根 4号ブロック群	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	12	0
清水柳北 中央尾根 5号ブロック群	1	0	0	0	0	0	0	0	0	4	6	1	7	5	64	2
清水柳北 中央尾根 6号ブロック群	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	22	15	0	0
清水柳北 中央尾根 7号ブロック群	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	11	0	74	0

されていたものと想定される。ガラス質黒色安山岩については、拓南東遺跡、大越遺跡などで尖頭器に用いられる一方、天台B遺跡や北原菅遺跡のように縦長剥片を素材としたナイフ形石器にも用いられている。但し、ガラス質黒色安山岩による石材消費が行われる遺跡は箱根山麓側に偏っている。ホルンフェルスについては、第4期前半に比べて全体的に消費量が低下し、ナイフ形石器などに用いられる割合も少なくなっている。例外的に多くのホルンフェルス製剥片、石核が出土した拓南東遺跡でも、ほとんどが小礫の打ち割りを行ったのみのものであり、石器素材の生産に結びついたものではない。

全体として、第4期後半の石器群における石材消費戦略は信州系黒曜石を基幹とする前半の石材消費戦略に、伊豆・箱根系黒曜石による段階的石材消費戦略を重ねたものと捉えられるが、第4期前半に比べると地域内の石材利用に大きく傾斜したものとなっている。

V. 考察

1. 石材消費、技術構造と遺跡の構成

以上で検討した石器製作と石材消費との変遷から、第3期から第4期の石器群の変化の背後にある行動論的な変化について考察する。

第3期前半においては石材消費の面から石器群に2つの様相が認められた。すなわち、黒曜石など特定石材によりナイフ形石器、搔器などが量産される大規模な石材消費を行った遺跡と、ホルンフェルスを中心とした小規模な剥片生産と搬入石器の二次加工・再加工等が行われる小規模な遺跡とである。原石を大量に消費して石器が量産される遺跡と、最小限の石器製作に留まる遺跡との2者が見られる。一方、器種構成の面では第3期前半の石器群では小形のナイフ形石器と大形のナイフ形石器（及び角錐状石器）が遺跡を違えて製作されるという二項的な構成が観察された。第3期前半の石器群における大小のナイフ形石器による二項性はAT下位から認められる二極構造の変換態と捉えられるが、狩猟対象に応じて狩猟具が適宜作り分けられている。これは、信州系黒曜石、柏峠産黒曜石、ホルンフェルスと、種々の石材で小形のナイフ形石器が量産される一方、必要に応じて箱根産黒曜石、ホルンフェルスといった近傍石材で大形のナイフ形石器を供給したものと考えられ、さらに推測するならば遊動的行動戦略の下、その時々局面に応じた石器製作を行ったものと評価できよう。第3期後半には第3期前半のようなナイフ形石器の大小の作り分けは不明瞭になるが、縦長から幅広まで多様な素材生産を行いナイフ形石器、切出形石器、搔器などの製作が行われている。

これに対し第4期前半になると、石器製作システムがナイフ形石器から削器類まで多くの器種を石刃で賄う、効率性の高いものに転換する。また、信州産黒曜石の段階的な消費を機軸とし、その消費に伴いホルンフェルスやガラス質黒色安山岩の供給が行われるようになる。

第4期後半への石器群の変化は、より信頼性重視 (Bleed 1986 ; 田村 1993) の石器装備への変化と見ることができる。第3期の石器群は、各種形態のナイフ形石器、角錐状石器、搔器などそれぞれ機能が特化した器種を別個に製作し、各局面で内容の大きく異なる石器群が残されている。汎用性が高い狩猟装備を特徴とする保守性重視の石器群とは言い難いが、長期的予測可能性の低い資源開発に対応した石器製作システムとなっている。第4期前半ではおそらく予測可能性の高い資源開発と対応した回帰的な遺跡形成と段階的な石器製作・石材消費が行われており、効率的な石器製作システムにより特定器種が量産されるという技術構造となる。第4期後半には、箱根産黒曜石の段階的な石器製作・石材消費 Staging strategy により小形尖頭器が量産されるようになる。信州産黒曜石への依存度が高かった第4期前半よりも石材獲得のコストの低い、より地域開発に適した石材消費戦略がとられている。尚、この地域では、縦長剥片生産に適さない箱根産黒曜石の大量消費と小形尖頭器の盛行とが同時に起こっており、2つの現象には密接な関係がある。

こうした石器製作の変化と対応して、石器集中部や礫群などの遺跡の構成にも変化が認められる。第3期前半の遺跡では1～数基の石器集中部、礫群の纏まりが丘陵尾根上に孤立的に出土する例が多い。前述した石材消費の大規模な遺跡でも石器集中部の規模に比して礫群が大規模に展開する遺跡はない。これに対して、第3期後半になると一部に10基以上の多数の礫群が連続して分布する遺跡が現れる。さらに第4期の遺跡は分布の粗密はあるものの、丘陵を覆うように石器集中部、礫群が広がる例が多く見られる。例えば足高尾上遺跡群では広合遺跡、二ツ洞遺跡、土手上遺跡など、同じ尾根上にこの時期の石器集中部群が高い密度で多く分布することが明らかにされている。第4期の遺跡において石材や器種組成などで内容の異なる石器集中部群が隣接し、さらにその外部でもナイフ形石器などが単独出土する散漫な遺物分布域が広がることは、同地点の稠密な利用を示すとともに、同一地点でも居住地移動によって機能が変化する状況（Binford 1982）を如実に示しているようである。第3期前半の石器群では信州系、伊豆・箱根系いずれの場合でも黒曜石は限られた遺跡で消費され、一方ホルンフェルスは多くの遺跡で消費される傾向があった。これに対し第4期前半になると石材の集中的な消費地点のより回帰的・兵站的な利用がなされるようになったとすると、第3期前半では別々の地点に遺されたような石器群が同一地点で遺されることになろう。言い換えると、第4期前半から現れる大規模な遺跡は第3期前半に別々の地点に移動して行われた石材消費が1箇所に集まったものと見なせるのであり、第3期から第4期への遺跡の変化は遺跡規模というよりも遺跡密度の増大と言えるであろう。以上のような状況は、第3期前半から第4期にかけて、特定の地点が回帰的に利用される度合いが高まっていったことを示すと考えられる。

2. 遺跡間変異と遺跡の分布・立地

以上に加えて、遺跡の分布・立地を考慮して居住形態の変化を検討する。

第3期前半から第4期後半までの遺跡分布を図13から図16にそれぞれ示した。単純な遺跡分布だけでは各時期に大きな変化はないように見えるが、遺跡の規模や機能を組み合わせて考えると遺跡立地には時間的変化が認められる。第3期前半（図13）では、上ノ池遺跡、子ノ神遺跡、桜畑上遺跡、陣場上B遺跡など大規模な石器製作地点はいずれも標高200m以下の低位丘陵上に立地し、標高の低い地点だけでなく高い地点まで分布するのは小規模な遺跡のみである。第3期後半（図14）についても同様のことが言え、大規模な石材消費が行われた上ノ池遺跡、子ノ神遺跡や、礫群が発達する中見代第Ⅱ遺跡などはやはりいずれも低位丘陵上に立地する。これは、開発領域が低位丘陵を中心としたものであったことを示していると考えられる。第4期前半（図15）になると、大規模な遺跡が足高尾上遺跡群、初音ヶ原遺跡・下原遺跡など、標高100～200m前後の地点で多く確認されているが、箱根山では観音洞G遺跡第1地点（標高410m）などのように比較的標高の高い地点にも大規模な遺跡が現れる。すなわち、低位丘陵だけではなく山腹まで兵站的狩猟・採集が行われ、その拠点的遺跡が形成されるようになったものと考えられる。さらに第4期後半（図16）には畑宿産黒曜石を消費する大規模な遺跡が箱根山山腹に多数認められるようになる。

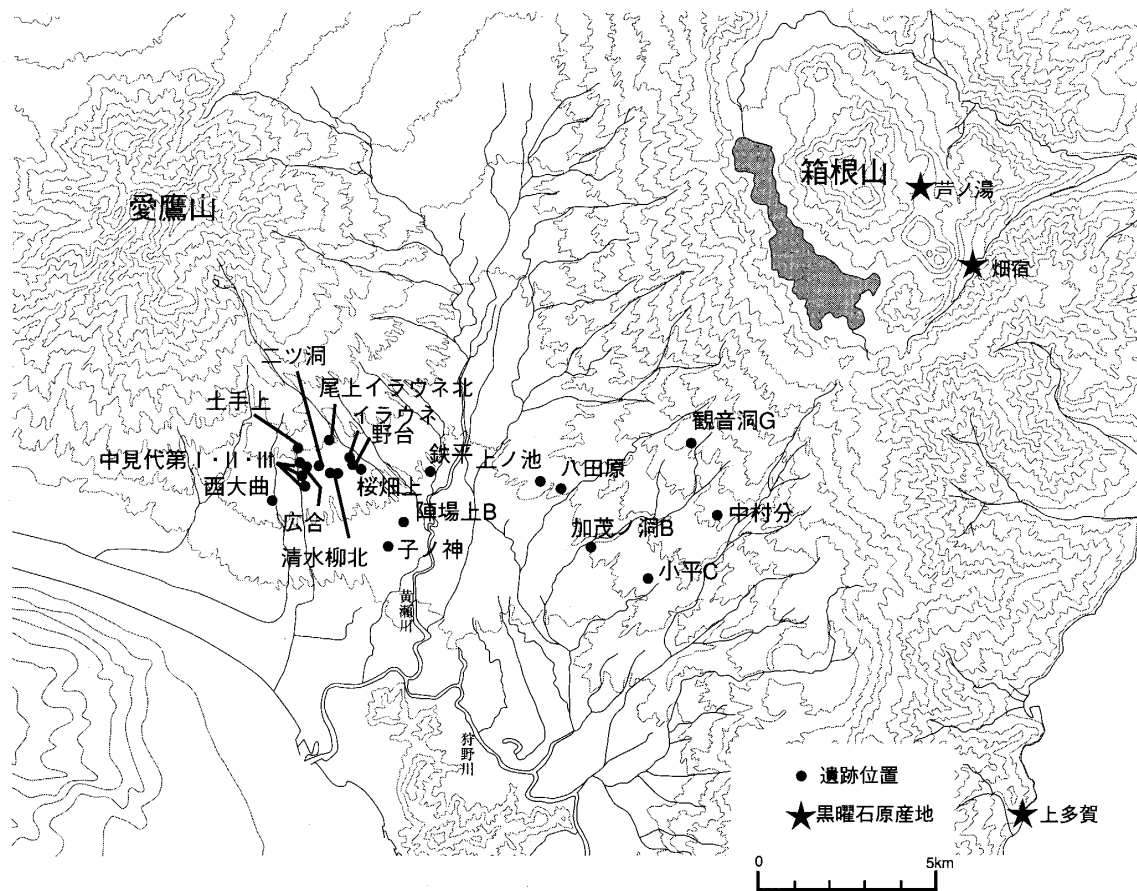


図13 第3期前半の遺跡分布

等高線は低い方から順に標高0m（海岸線）、50m、そして標高100m以上では100mごとを示す。

こうした遺跡分布・立地の変化については古環境を組み合わせる必要があるが、この地域の当時の環境に関する情報は多くない。グリーンランド氷床コアにより明らかにされた気候変動によるとAT降灰前後の小温暖期の後は激しく寒暖を繰り返しながら寒冷化し、較正年代で約24000年前頃に最寒冷期を迎え、再び温暖化することが明らかにされている。相模野台地の砂川期の石器群が較正年代で約23000年前とされており（砂田 1999）、これが第4期前半と対応するとすれば、第3期後半から第4期直前頃を境に気候が温暖に転ずることになる。植生分析では、これに明瞭に対応するような変化のパターンは認められていない。愛鷹・箱根山麓のローム層は植物遺存体に残りにくいことが知られているが、幾つかの遺跡で植物珪酸体による植生分析が行われている。箱根山麓では下原遺跡、加茂ノ洞B遺跡（植木他 1996）、初音ヶ原遺跡（古環境研究所 1999）で実施されており、愛鷹山麓では尾上イラウネ北遺跡、西洞遺跡（小山他 1992）でATより上位の層について行われており、いずれの遺跡でも傾向は一致している。基本的には後期旧石器時代を通じてネザサ節を主体とするイネ科植生が継続しており、休場層でクマザサ属に幾分増加傾向が見られ、また下原遺跡ではBB II層、BB III層で前後の時期よりウシクサ族ススキ属が多いという。ネザサ節は森林の林床では生育しにくく、ススキ属も開けた場所に生育する種が多いとされ

後期旧石器時代後半期の居住形態の地域的様相

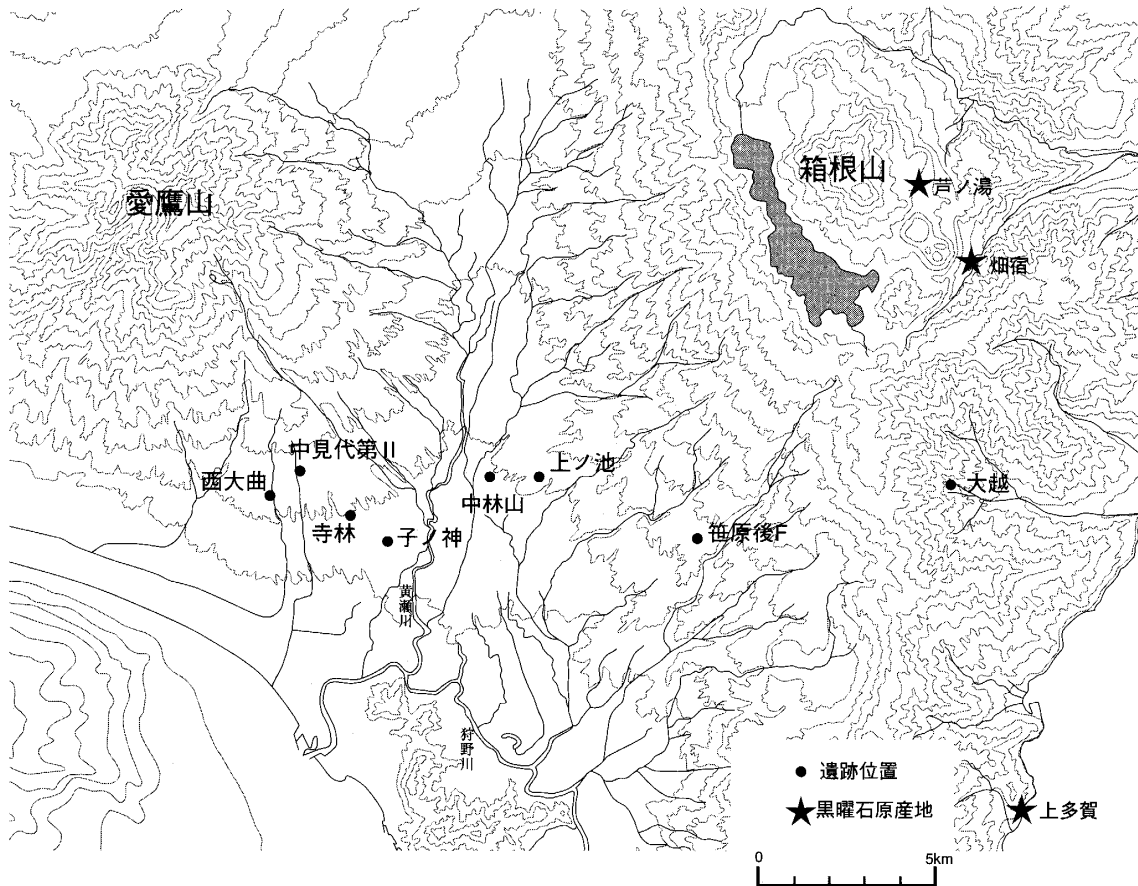


図14 第3期後半の遺跡分布

る。よって、少なくともこれらの遺跡が位置する標高100~200m程度の地帯は樹木の少ない開けた環境が継続していたという結論が得られている。

時間的な植生変化に比べると同時期の垂直方向の植生変化がより大きかったかもしれない。現在の箱根山では標高500~700mを境に植生帯が照葉樹林帯から夏緑樹林帯へ遷移することが知られている。古環境分析からは明らかにされていないが⁵⁾、山麓でも標高の低い丘陵と、やや標高の高い山腹とでは植生が異なっていた可能性がある。さらに、先述した寒冷期から温暖期への気候変動により標高による資源分布が変化した可能性も考えられる。

第3期後半から第4期直前頃に寒冷期から温暖化に転ずるといふ想定が正しいとすると、遺跡立地の変化もこれに関連したものと考えられる。第3期の開発領域が低位丘陵を中心としたものであったのに対し、第4期前半には主たる開発領域が山腹へも広がったと考えられ、これは標高による資源分布の変化と対応した現象と推測される。さらに第4期後半には箱根山腹における大規模遺跡はさらに増加するが、それらの遺跡は箱根産黒曜石の消費と密接に関連したものである。すなわち、第4期前半と比べると、後半には箱根山山腹の開発頻度が上がるとともにそれが石材補給を組み込む形で展開するようになったものと評価できる。

以上のように、第3期から第4期の石器群の変化の背後には、こうした地域開発と対応した居住

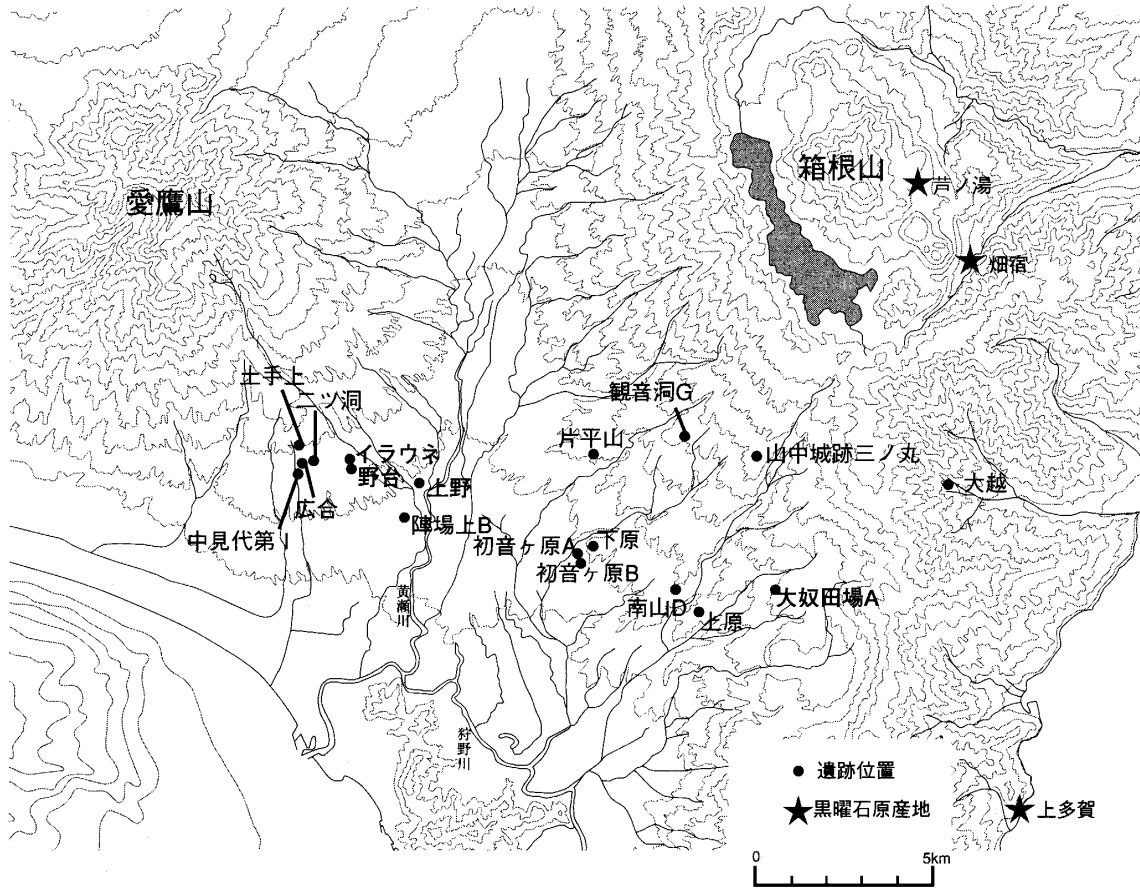


図15 第4期前半の遺跡分布

形態の変化があった可能性が指摘できる。

VI. まとめ

本稿で検討した結果をまとめると次の通りである。愛鷹・箱根第3期前半には山麓の低位丘陵を主たる開発領域とした遊動性の高い居住形態であったが、第3期後半を経て第4期前半には長期的・回帰的に利用される兵站的な居住形態を示すようになった。また、箱根山山腹へも開発領域が広がるのに伴い、第4期後半には箱根産黒曜石の獲得を組み込んだ形で箱根山山腹への回帰的移動が行われるようになったと推測された。こうした開発領域の変化は恐らく気候変動による資源分布の変化と対応しており、愛鷹・箱根山麓に特有の資源環境へ適応した結果と推測され、地域開発型の居住形態に向かって推移していく過程として捉えられた。石器群の技術構造上の変化はこの過程と密接に関連しており、第3期では各局面に対応した石器製作を行うシステムであるが、第4期前半にはナイフ形石器を効率的石器製作システムにより量産するようになり、第4期後半にはさらに石材の潤沢な供給を背景として尖頭器の量産を行う石器製作システムが現れている。

後期旧石器時代後半期の居住形態の地域的様相

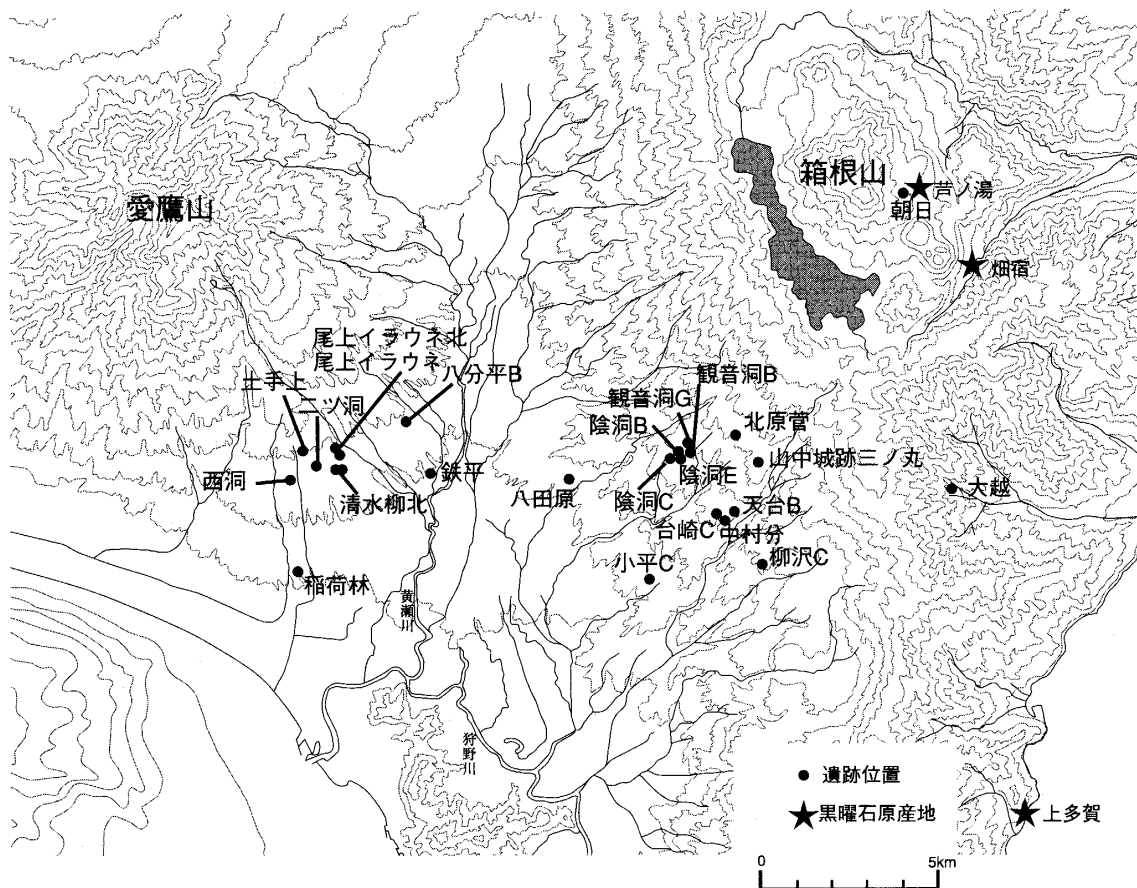


図16 第4期後半の遺跡分布

このように、この時期の居住形態、石器群の技術構造や石材消費の変化を地域開発の進行に対応したものとして評価した。ここで提示した居住形態の変化のモデルは完全に地域的なものであり、他の地域では別の説明が求められる。例えば信州黒曜石原産地では、原産地直下に砂川期の遺跡はめられるのに対しこれに続くナイフ形石器終末期の遺跡が乏しいことが指摘されており（島田1998など）、箱根の黒曜石原産地とは異なる変化となっている。こうした各地域の変化を説明し、さらにそれを間地域的なモデルの中いかに位置づけるかが今後の課題である。

本稿は、筆者が2004年12月に東京大学大学院人文社会系研究科に提出した修士論文をもとに、加筆修正したものである。

本論の作成に当たっては、修士論文の審査を担当して下さった佐藤宏之先生、今村啓爾先生、大貫静夫先生、後藤直先生をはじめ、人文社会系研究科の安斎正人先生、城西大学の国武貞克氏にご指導・ご助言いただきました。資料調査に際しては、熱海市教育委員会・栗木崇氏、函南町教育委員会・長野康敏氏、静岡県埋蔵文化財調査研究所・笹原芳郎氏、前嶋秀張氏、長泉町教育委員会・廣瀬高文氏、沼津市文化財センター・池谷信之氏、高尾好之氏、長野裕之氏、三島市教育委員会・鈴木敏中氏、寺田光一郎氏の諸機関・各氏にお世話になり、見学の便宜をいただきました。

中村雄紀

また、東京大学大学院新領域創成科学研究科の森先一貴氏、石器文化研究会の織笠明子氏、加藤勝仁氏、笹原芳郎氏、諏訪順氏、西井幸雄氏、野口淳氏ほかの方々にご意見いただくことができました。末筆ながら皆様に謹んで御礼申し上げます。

註

- 1) 報告書によっては頁岩とされている場合もあるが、本稿では、引用部分を除いてホルンフェルスに統一した。
- 2) 黒曜石の原産地推定については、原産地推定分析がなされているものはこれに従ったが、それ以外は肉眼観察により識別した。黒曜石原産地推定分析は、下原遺跡、八田原遺跡、鉄平遺跡、檜林A遺跡、上ノ池遺跡、寺林遺跡、拓南東遺跡、初音ヶ原B遺跡第1地点、笹原後F遺跡、山中城山ノ丸遺跡の全点、初音ヶ原A遺跡第2地点、初音ヶ原B遺跡第3地点の主要石器については、望月明彦氏による蛍光X線分析の結果が各遺跡の報告書に公表されている。以下、本稿では、こうした分析結果に基づく場合「～産」、それ以外の場合「～系」と表記する。
- 3) 報文によれば第1地点は天地返しの影響が大きく、縄文時代の包含層がほとんど失われていたという。ローム層の保存状態については記載がないが、休場層上面では土坑群が確認されており、休場層への攪乱は最小限だったものと見なせるようである。
- 4) 北原菅遺跡は概報では休場層中のスコリア層により2つの文化層に分かれるものとされていたが、本稿では第4期後半を中心とする資料群として、文化層を分離せず一括して扱っている。
- 5) 比較的高所の遺跡では、標高550mの山中城跡三ノ丸遺跡第1地点で、花粉分析によりローム層中からイネ科、キク亜科、シダ類に加えて、モミ属など木本類の花粉が微量に検出されている(パリーノ・サーヴェイ株式会社 1995)。但し検出された花粉があまりに微量なため植生復元は行われていない。

<引用・参考文献>

- 池谷信之 2001「石器石材とナイフ形石器の製作地」『第7回石器文化研究交流会—発表要旨—』石器文化研究会, 63-74
- 池谷信之・望月明彦 1998「愛鷹山麓における石材組成の変遷」『静岡県考古学研究』30: 21-44
- 伊藤恒彦 1995「本遺跡で確認された後期旧石器時代石器群の様相について: 尖頭器の変遷を中心にして」『山中城跡三ノ丸第1地点』三島市教育委員会, 291-300
- 1999「箱根西麓におけるナイフ形石器石器群終末期の再検討: 当地の「砂川型式期」石器群の理解にむけて」『初音ヶ原遺跡』三島市教育委員会, 369-374
- 稲田孝司 2004「後期旧石器時代の狩猟と動物群」稲田孝司編『旧石器時代における人間の居住様式と動物相との相関に関する研究』平成13年度～平成15年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))研究成果報告書, 47-55
- 今村啓爾 2004「箱根南西山麓先土器時代陥穴の使用法」『考古学研究』第51巻第1号: 18-33
- 植木真吾・馬場健司・中根秀二 1996「陥穴状土坑の埋積過程と古環境」『下原遺跡Ⅱ』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第72集, 静岡県埋蔵文化財調査研究所, 51-86
- 函南町教育委員会 1989『函南スプリングスゴルフ場用地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』
- 2001『上原遺跡』東京電力株式会社・函南町教育委員会
- 国武貞克 1999「石材消費と石器製作, 廃棄による遺跡の類別: 行動論的理解に向けた分析法の試み」『考古学研究』第46巻第3号: 35-55
- 古環境研究所 1999「初音ヶ原遺跡の植物珪酸体分析」『初音ヶ原遺跡』三島市教育委員会, 384-392
- 小山修司・杉山真二・古川順子 1992「尾上イラウネ遺跡のテフラ層序と古環境復元」『尾上イラウネ遺跡

後期旧石器時代後半期の居住形態の地域的様相

発掘調査報告書Ⅱ その2』沼津市文化財調査報告書第53集，沼津市教育委員会，35-103

- 坂詰秀一 1962「小説“箱根山”からの発掘 芦ノ湯の旧石器遺跡」『科学朝日』1962-2：97-100
 1967「芦ノ湯の旧石器時代遺跡」『箱根町誌』第1巻，箱根町誌編纂委員会，67-81
- 笹原芳郎 1995「第2期・第3期の石器群」『愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年：予稿集』静岡県考古学会シンポジウムⅩ，22-27
 1996「第2・3期の石器群をめぐって」『愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年：収録集』静岡県考古学会シンポジウムⅩ，45-48
 1997「箱根西麓下原遺跡の分析（黒曜石原産地分析と個別別資料操作をもとにして）」『沼津市博物館紀要』21：21-42
 2005「東海東部（愛鷹・箱根山麓）」『石器文化研究』11：191-225
- 佐藤宏之 1992『日本旧石器文化の構造と進化』柏書房
 1995「技術的組織・変形論・石材受給：下総台地後期旧石器時代の社会生態学的考察」『考古学研究』第42巻第1号：27-53
 2002「日本列島旧石器時代の陥し穴猟」佐々木史郎編『先史狩猟採集文化研究の新しい視野』国立民族学博物館調査報告33，83-108
- 静岡県考古学会 1995『愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年：予稿集』静岡県考古学会シンポジウムⅩ
 1996『愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年：収録集』静岡県考古学会シンポジウムⅩ
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1995『下原遺跡Ⅰ』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第64集
 1996『加茂ノ洞B遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第71集
 1997『八田原遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第87集
 1998 a 『上ノ池遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第99集
 1998 b 『下原遺跡Ⅲ』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第106集
 2003 a 『鉄平遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第137集
 2003 b 『大岡元長窪線関連遺跡Ⅰ』静岡県埋蔵文化財調査研究所報告 第138集
 2003 c 『寺林遺跡・虎杖原古墳』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第142集
- 島田和高 1998「中部日本南部における旧石器地域社会の一様相：砂川期における地区の成り立ちと地域の構造」『駿台史學』第102号：1-49
- 鈴木次郎・矢島國雄 1978「先土器時代の石器群とその編年」『日本考古学を学ぶ』1，有斐閣，144-169
- 鈴木敏中 1986「初音ヶ原A遺跡」『昭和60年度県内発掘調査の概要』静岡県考古学会
- 鈴木裕篤 2002「西大曲遺跡」『沼津市史 資料編 考古』，16-20
- 砂田佳弘 1999「相模野細石器の暦年補正年代」『吉岡遺跡Ⅹ』かながわ考古学財団調査報告49，財団法人かながわ考古学財団，25-30
- 諏訪間順 1988「相模野台地における石器群の変遷について：層位的出土例の検討による石器群の段階的把握」『神奈川考古』第24号：1-30
 1989「ナイフ形石器文化の終焉と尖頭器文化の成立」『旧石器考古学』38：93-102
 2001「相模野旧石器編年の到達点」『相模野旧石器編年の到達点』平成12年度，神奈川県考古学会考古学講座，1-20
- 瀬川裕市郎 1983「第1章 先土器時代」『静岡県史』資料編3 考古三，1-64
- 関野哲夫 1990「石器について」『清水柳北遺跡発掘調査報告書 その2』沼津市文化財調査報告書第48集，沼津市教育委員会，620-654
- 高尾好之 1994「愛鷹山南麓・箱根西麓の後期旧石器時代石器群編年試案」『地域と考古学：向坂鋼二先生還暦記念論集』，1-29
- 田村 隆 1993「野辺山を見る目」『細石刃文化研究のための新たな展開Ⅱ』ハヶ岳旧石器研究グループ・

中村雄紀

- 佐久考古学会, 280-298
- 1998「移行の論理：石器群のデザイン分析と文化＝社会理論」『先史考古学論集』第7集：1-48
辻誠一郎・奥野充・福島大輔 2002「テフラの放射性炭素年代」『日本先史時代の14C年代』日本第四紀学会, 41-58
- 長泉町教育委員会 1979『下長窪上野遺跡』
1981『八分平B・富士石遺跡』静岡県教育委員会・長泉町教育委員会
1986『中尾・イラウネ・野台』静岡県東部農林事務所・長泉町教育委員会
1989『富士石遺跡群』静岡県東部農林事務所・長泉町教育委員会
1994『平畦遺跡・陣場上B遺跡』
- 中村雄紀 2005「愛鷹・箱根山麓における「ナイフ形石器終末期」の遺跡群」『石器文化研究』12：121-146
- 沼津市教育委員会 1980『西大曲遺跡発掘調査概報』沼津市文化財調査報告書第20集
1981『尾上イラウネ遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第23集
1982『子ノ神・大谷津・山崎Ⅱ・丸尾Ⅱ』沼津市文化財調査報告書第27集
1987『広合遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第41集
1988『土手上・中見代第Ⅱ・第Ⅲ遺跡発掘調査報告書（足高尾上No.1・6・7遺跡）』沼津市文化財調査報告書第43集
1989a『清水柳北遺跡発掘調査報告書 その2』沼津市文化財調査報告書第48集
1989b『中見代第Ⅰ遺跡調査報告書（足高尾上No.5遺跡）』沼津市文化財調査報告書第50集
1990『広合遺跡（b・c・d区）・広合南遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第49集
1991『広合遺跡（e区）・ニツ洞遺跡（a区）発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第52集
1992『尾上イラウネ遺跡発掘調査報告書Ⅱ その1』沼津市文化財調査報告書第53集
1995『土手上遺跡（b・c区）発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第56集
1998『拓南東遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第65集
1999『西洞（b区-1）遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第69集
2002『稲荷林遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第80集
- パリノ・サーヴェイ株式会社 1995「花粉分析」『山中城跡三ノ丸第1地点』三島市教育委員会, 367-369
- 前嶋秀張 1995「第4期・第5期の石器群」『愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年：予稿集』静岡県考古学会シンポジウムⅨ, 28-34
- 前嶋秀張・森島富士夫 2003「ホルンフェルスの入手先を明らかにする」『静岡県考古学研究』35：1-12
- 三島市教育委員会 1987『北原菅遺跡』
1990『三島スプリングスC. Cゴルフ場内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』
1992『三島スプリングスC. Cゴルフ場内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』
1994a『五輪・観音洞・元山中・陰洞遺跡Ⅰ』
1994b『五輪・観音洞・元山中・陰洞遺跡Ⅱ』
1994c『三島市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ』
1995『山中城跡三ノ丸第1地点』
1997『小平C遺跡 小平B遺跡』
1998a『中村分遺跡 天台B遺跡 台崎C遺跡』
1998b『三島市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅵ』
1999『初音ヶ原遺跡』

後期旧石器時代後半期の居住形態の地域的様相

2002『三島市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ』

2004『南山D遺跡 東山遺跡 香音Ⅱ・D遺跡 奥山遺跡』

武蔵考古学研究所 1995『大越遺跡』熱海市教育委員会

望月明彦・鈴木敏中 1995「自然化学分析 第2章 蛍光X線による出土黒曜石器群の原産地同定」『三島市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ』三島市教育委員会, 80-94

Binford, L. R. 1977 Forty-seven Trips: A Case Study in the Character of Archaeological Formation Process. In Wright, R.V.S.(ed.), *Stone Tools as Cultural Markers: Change, Evolution and Complexity*, 22-36

Binford, L. R. 1982 The Archaeology of Place. *Journal of Anthropological Archaeology*, Vol.1: 5-31.

Binford, L. R. and J. F. O'Connell 1984 An Alyawara Day: The Stone Quarry. *Journal of Anthropological Research* Vol.40: 406-432.

Bleed, P. 1986 The Optimal Design of Hunting Weapons: Maintainability or Reliability. *American Antiquity* Vol.51: 737-747.

<図の出典>

第1図：静岡県考古学会1996

第3図1～11：沼津市教育委員会1982, 12～23：長泉町教育委員会1994, 24～26：沼津市教育委員会1992, 27～32：静岡県埋蔵文化財調査研究所2003 b

第4図1～9：静岡県埋蔵文化財調査研究所1998 a, 10～21：長泉町教育委員会1986

第5図1～4：沼津市教育委員会1988, 5～12：沼津市教育委員会1989 b

第6図1～10：沼津市教育委員会1982, 11～17：静岡県埋蔵文化財調査研究所1998 a, 20～29：静岡県考古学会1995, 30～40：静岡県埋蔵文化財調査研究所2003 c, 41～45：三島市教育委員会2002

第7図：三島市教育委員会1994 a

第8図1～7：三島市教育委員会1998 b, 8～20：三島市教育委員会1999, 21～26：長泉町教育委員会1986, 27～35：長泉町教育委員会1979, 36～47：三島市教育委員会2004, 48～53：函南町教育委員会1989

第9図1～5：三島市教育委員会1999, 6：三島市教育委員会1990, 7～9：函南町教育委員会2001, 10～12：静岡県埋蔵文化財調査研究所1995, 13～15：沼津市教育委員会1987, 16：沼津市教育委員会1989 b, 17：三島市教育委員会2004

第10図1～24：三島市教育委員会1998 a, 25～42：三島市教育委員会1987

第11図1～19：沼津市教育委員会1998, 20～28：長泉町教育委員会1981, 29～35：静岡県埋蔵文化財調査研究所2003 a, 36～43：静岡県埋蔵文化財調査研究所1997

第12図：武蔵考古学研究所1995

Late Upper Paleolithic Settlement Patterns around Mt. Ashitaka and Mt. Hakone

NAKAMURA Yuuki

This paper investigates a regional model of settlement patterns during late Upper Paleolithic around Mt. Ashitaka and Mt. Hakone. The chronological sequence of Upper Paleolithic around Mt. Ashitaka and Mt. Hakone is roughly divided into Phases I to V; Phases III to V belong to late Upper Paleolithic.. This paper focuses on Phases III and IV, divided into two parts, early and late, respectively.

The shift in site distribution accompanied by the interaction of technological organization, raw material procurement and settlement pattern: It is assumed that this phenomenon reflect the shift in distribution of resources caused by the climate change. In the early part of Phase III, highly mobile hunter-gatherers with flexible technological system moved mainly around the bases of mountains. By the early part of Phase IV, they switched to logistical settlement pattern, and adopted efficient blade technology; their exploitation zone expanded to the mountainside of Mt. Hakone. In the late part of Phase IV, procurement of Hakone obsidian was set in the periodic occupations of Mt. Hakone; their lithic production system are characterized by the mass-production of small points, based on the richness of raw material. It is concluded that the shift in settlement pattern and lithic industries during this period occurred in response to the progress in local resource exploitation.